

日本国際情報学会誌
2017年度 通巻 第2号

Kokusai-joho



日本国際情報学会

(目次)

発刊の言葉	-----	1
巻頭言	-----	2
報告論文		
自由投稿論文: Review		
謎の中華料理 油淋鶏 増子 保志	-----	3
看護教育における創造性・論理的思考力育成方法の考察 —プログラミング教育を用いることでの可能性について— 草野 純子	-----	10
研究ノート: Research Report		
毛沢東からの贈り物 —毛沢東崇拜のなかのマンゴー効果— 増子 保志	-----	18
香港の水上レストラン —観光資源としての水上文化— 増子保志、榊マリ子	-----	22
モンゴルの高等教育に求められる社会的機能と役割 —日本の近代化形成過程における経験から— 吉澤 智也	-----	25
記憶の経験値として生きるソフト・パワーの展開 —21世紀のパクス・モンゴリカを求めて— 吉澤 智也	-----	31
情報と文化に基づく授業の構造化モデル 符 儒徳	-----	34
日本国際情報学会誌規程	-----	42
編集後記	-----	46

発刊の言葉

日本国際情報学会 会長 近藤大博

社会科学は、その研究の歴史において、多くの先達の知恵と経験を蓄積させ現在があります。たしかに知識の積重ねと経験に支えられた研究は重要です。それらの蓄積が各学問の礎としてあります。

しかし、今日、国際化・グローバル化の波は、各学問の境界・領域・枠をいとも容易に乗り越えます。各学問の境界・領域・枠を乗り越えたかたちで、新たな問題が生じています。

各研究者は、従来の礎・専門領域に拘泥しては、新時代に、新たな問題に、対処・対応できません。

また、グローバル化は、国境を超えての研究協力、積極的な情報の受発信の機会をもたらしました。この機会を大いに活用すべきです。縦横に協働研究すべきです。研究成果を共有すべきです。

今日の社会的・公共的問題は、知識・学問と社会・政治の境目にあります。さらには従来の学問体系では対処不能・対応不能となっています。解決するためには、学際的な集団の確立と学際的な取り組み、ひいては学際的な理論的枠組みが必要となります。

つまり、21世紀の現在、社会学・経済学・歴史学・心理学・哲学等々の専門領域・枠を超えた協働研究が必要不可欠となってきたのです。

既存の考え方・方法論、既存の専門分野にとらわれることなく、幅広く研究テーマを募りたいと存じます。学際的な研究に積極的に発表の機会を与えたいと存じます。多くの方々が斬新的で視点の違う研究を競い合う場を設定したいと存じます。

日本国際情報学会は、上のような思いを密かに胸に、2002年3月に設立されました。

このたび、会員の研究を促進すべく、活動の成果を公表・公開すべく、学会誌発行を企画しました。本誌がその創刊号です。

今回発刊にあたり、多くの方々から、ご指導、ご支援を賜りました。厚く御礼申し上げます。

本誌が、広く世に迎えられ、新しい社会の創造に多少なりとも寄与できますよう、さらに学問の垣根が取り払われた研究の場として数多くの研究者に活用していただきますよう、祈念いたします。

2004年5月10日

当学会の目的の一つは、日本語で思索する全世界の同学のフォーラムを形成することです。その目的達成のためにも、従来の機関誌『国際情報研究』を刷新し、『日本国際情報学会誌』としました。新しく編集実務を担当することになった編集委員会の諸兄の尽力あつてのことです。

全世界に読者を求めるため、インターネットにて公開発行いたします。もちろん、ダウンロードしてプリントアウトすれば、通常の紙媒体の冊子と同様になります。活用願います。なお、学会論文の質の向上を目指すため査読の方式をも、今号をもって改めました。詳しくは、「投稿論文の査読について」をご覧ください。

当学会の会員層は産学官に属する人材で形成され、その研究テーマは総合社会情報研究を中心に幅広いジャンルを網羅しており、新たな学術的価値創造を可能にしています。今後、会員間のコミュニケーションをより充実させ、社会に貢献する学会活動を目指したいと存じ上げますので、よろしくご協力をお願い申し上げます。

2008年12月5日

巻頭言

新たな学問探究の「自由」な地平の開鑿を求めて ——創刊号を承けて——

佐々木 健

ここに『Kokusai-joho』第2号をお届けします。

本誌は、「国際情報学会」の機関誌『国際情報研究』より分離独立して、自由投稿論文、研究ノート、および書評に照準した部門として、昨年、2016年に創刊されました。

《今日は、新たな時代の誕生の時期であることは容易に見て取ることができるでしょう。

生みの苦しみ (labour) をとことん引き受け、学問探究の新たな地平を切り拓く「精神の労働」(Arbeit des Geistes) が要請されることを言うまでもありません。既存の知の区分、既成の思考の枠組みから「自由」に、思い切った「観念の冒険」(Adventure of Ideas) を存分に行うことのできる思考実験の公共的な場を確保したいと念ずるものであります。》

創刊号巻頭言にこう記しました。この「願望と希求」をずっと保持していきたいものです。

* * * * *

ちょうど120年前に生を享けた日本の哲学者、三木清 (1897-1945) が1938年 (昭和13年) に発表した小論「如何に読書すべきか」に次のような一節があります。

「かように発見的である [= 「著者がさほど重要性をおこななかったところに読者が自分自身にとって重要な意味を発見する」] ということは読書において何よりも大切である。……発見的に読むには自分自身に何か問題をもって書物に対しなければならぬ。そして読書に際しても自分で考えながら読むようにしなければならぬ。読書はその場合著者と自分との間の対話になる。……読書は思索のためのものでなければならず、むしろ読書そのものに思索が結び附かなければならない。……批判的に読むということは自分で思索しながら読むということであり、自分で思索しながら読むということは単に批判的に読むということに止まらないで、発見的に読むということではならぬ。」

学問と人生とに相渉る読書のあり方を論じたこの小論は、単なる読書指導書ではありません。読書という行為の基本原則と根源的意義とを闡明しており、そのことによって同時に、学問的探究に関する卓抜した論究となっています。探究という人間的営為の意義と構造をその普遍的な相貌において開示しています。

上の一文における2個のキーワードを適宜、言い直してみましよう。

「読書」は学問研究・探究と、「書物」は諸問題・課題・主題・対象、既存の価値体系、人間社会の組織構造、一般的に、人間存在の歴史的境位等々と言い換えてみます。

このような手続きとロジックを辿れば、上の一文の「鍵鑰」概念となっている「発見的」とはどのような論理的局面であるのか、少なくとも、どのような方向に望見される事態であるのか、了解されるのではないのでしょうか。

報告論文
(自由投稿論文 : Review)

報告論文は審査・査読を行っておりません。

謎の中華料理 油淋鶏

増子保志

日本国際情報学会

Strange of Chinese food “Yurinchi”

MASUKO Yasushi

Japanese Society for Global Social and Cultural Studies

Chinese food in our country has Chinese food Japanese style which was uniquely arranged, not authentic Chinese, including “Hatupousai” and “Chyukadon”. One of them is “Yurinchi”. This is served as one of the Chinese cuisine very commonly, such as a Chinese restaurant in the street and a pub. Because of its convenience, it receives the impression that it is cook arranged in a Japanese style. Also, many home-cooked recipes exist that are arranged in a Japanese style, and have become popular in general, and “Yurinchi” are recognized as one of the Chinese cuisines for most Japanese. However, in the media, there are many discourses that are regarded as a cuisine originating in China. However, in China, which is said to be home-grown, it is almost impossible to see restaurants and recipes for home-cooked dishes at all. Even asking the chef of Cantonese cuisine, only ambiguous answers such as whether it is Taiwanese food rather than Cantonese cuisine can only be obtained. Also in books of household dishes published in Hong Kong and Taiwan, there is no description about “Yurinchi”, and that description is not found in special cookbooks. However, naming and pronunciation are in Chinese. If so, when and where was the “Yurinchi”, how was it brought to Japan? Is it really a dish derived from China?

1. はじめに

我が国における中華料理には、八宝菜や中華丼をはじめとして、本場中国にはない独自にアレンジされた“ジャパニーズ中華”¹なる中華料理が存在する。その中の一つに油淋鶏がある。油淋鶏は、街場の中華料理屋をはじめ居酒屋などで、ごく普通に中華料理の一つとして提供されている。一般に認知されている油淋鶏は、鶏のもも肉を唐揚げ²にしたもの、もしくは、竜田揚げにしたものに、刻んだ長ネギをのせて、単に甘酢たれをかけただけの料理である。その簡便性からいかにも日本風にアレンジされた料理という印象をうける。

また、家庭料理においても日本風にアレンジされた多くのレシピが存在し、一般大衆化しており、大半の日本人にとって油淋鶏は、中華料理の一つとして認識されている。

しかし、メディアの中での扱いは、「本場中国の油淋鶏は・・・」と、中国発祥の料理とされる言説が数多くみられる。しかしながら、その本場と言われている中国においては、レストランのメニューにも家庭料理のレシピにも皆無ではないものの、殆ど見られない。広東料理のシェフに尋ねても、広東料理ではなく、台湾料理ではないのかなどと曖昧な回答しか得られない。香港や台湾で出版されている家庭料理の書籍においても、油淋鶏についての記載はなく、専

¹ 筆者、増子の造語。

² 小学館の『日本大百科全書』によると「から揚げは唐揚

げ、すなわち中国風の揚げ物の意であり、空揚げの文字を用い衣をつけない揚げ物は、素揚げという

門の料理書にもその記述はみられない。

そして、ネーミングと発音は中国語である。とすれば、油淋鶏はいつ頃、どこで作られ、どの様に日本に持ち込まれたものなのであろうか？果たして油淋鶏は本当に中国由来の料理なのであろうか？

ジャパニーズ中華に関しては、「天津飯」について殷晴の研究³があり、中国には存在しない天津飯の起源について考察を行っている。また、「麻婆豆腐」については、四川料理の陳建民⁴が日本風にアレンジした麻婆豆腐を普及させたことが知られている。しかしながら油淋鶏に関しては管見の限り、見るべきものが無い。

本稿では、小論ながら油淋鶏の中の油淋という調理方法、現在の油淋鶏の基本である唐揚げについてその起源を探り、さらにわが国のメディアの中で油淋鶏がどの様に説明されているか、その言説を中心に検討を行い、油淋鶏とは、如何なるものかについて考察する。



我が国で普通にみられる油淋鶏（筆者撮影）

2. 油淋とは

油淋鶏の、油淋とはどのようなものなのか。

井上敬勝の『中国料理用語辞典』によると、油淋鶏の具体的な説明はなく、油淋という調理方法としての記載のみで「油淋とはイウリン、料理の仕上がり時に油をかけた料理法」⁵であるとしている。

文化人類学者の周達生は、「油淋とは油をかけながら揚げること。油淋鶏は調味料で下味をつけたニワトリのもも肉を熱した揚げ油の中に入れ、玉じゃくしでナベの油をすくってはかけ、すくってはかけて揚げた料理。丸ごとのニワトリを揚げる場合は、こうでもしなければ、油がもったいないだろう⁶」と記している。

また、『辻調が教えるおいしさの公式』（148P）によると「“油淋”とは、あげ方を指す。本来は、鶏一羽等大きな材料に油をかけて火を通す方法」⁷とされ、肉を小さく切る唐揚げとは質的に異なっている。

以上のことから油淋とは、

- ① 油を材料にかけまわすこと。
- ② 材料（鶏肉）1羽を丸ごと使用すること。

であることが分かる。

しかしながら、同じ辻調（辻調理師専門学校）監修の『専門料理全書 改訂中国料理』の油淋鶏（鶏肉の甘酢がけ）の項では「油淋とは、少ない油で鶏に油をかけながら揚げる調理方法のことです。ここでは開いた鶏もも肉を揚げ、甘酢にしょうがとごま油をきかしたソースをかけます。」とあり、調理のポイントとして、①鶏肉は同じ厚さに②表面をカリッと揚げる③骨付き鶏もも肉でもおいしい⁸とあり、いつのまにか調理方法が変化している。

³ 殷晴「天津飯の由来」<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/ginnan/ginnan29/>（2017年2月29日アクセス）

⁴ 陳建民(1919-1990) 中国四川省出身の料理人。「私の中華料理少しウソある。でもそれいいウソ。美味しいウソ」と本場の中 華料理を日本人の味覚に合わせたアレンジを積極的に行った。麻婆豆腐、エビチリ、担々麵等のアレンジで有名。

⁵ 井上敬勝『中国料理用語辞典』日本経済新聞社、1993年3月。P53。

⁶ 周達生『中国食物誌』創元社、2009年9月。P148。

⁷ 辻調理専門学校編『辻調が教えるおいしさの公式 中国料理』筑摩書房、2009年9月。P148。

⁸ 辻調理専門学校監修『改訂中国料理』1998年6月。P76。

3. 中国料理としての唐揚げ

「揚げる」という調理法が広く一般に普及するようになったのは、江戸時代になってからで、江戸時代の揚げ物について次のように記されている。

「江戸時代に「素揚げ」「空揚げ」ということはなかったが、現実には両方ともにあった。現在の衣揚げに相当する揚げ物もあったが、衣揚げという言葉は文政以後、まれに使用される程度で、広く流通することはなかったようである」⁹

唐揚げ→“唐”→中国 というイメージがなくもないが、江戸時代の料理書である『素人包丁』では、魚介類や野菜類の素揚げや小麦をまぶして揚げたものを「煎出(いりだし)」「衣かけ」と呼んでいた。唐揚げの表記については、「唐揚げ」の方が「空揚げ」よりも歴史がある。江戸時代初期に中国から伝えられた晋茶料理の中に「唐揚」(からあげまたはとうあげ)があり、1772年に書かれた『晋茶料理抄』の中に「唐揚げ」の語が見られる。これは、豆腐を小さく切って油で揚げた後に醤油と酒で煮たものであった。一方、同書にみられる「唐揚げ」は精進料理で油揚げしたものをさらに煮たものであり、現在の唐揚げとは異にするものと思われる。

日本のレストランとして1932年に初めて唐揚げをメニュー化した銀座三笠会館も中国伝来説から「唐揚げ」の商品名で提供している。

渋川祐子によると、わが国における、鶏肉の唐揚げの初出は、1924(大正13)年刊行の『家庭鶏肉鶏卵料理』(赤堀峯吉著、大倉書店)である。その中では、「鶏肉のから揚げ」が2種類紹介されている。

① 叩いて挽肉状にした鶏肉を丸め、片栗粉をつけて揚げたもの。

② 鶏肉の薄切りに片栗粉をまぶして揚げたもの。
=現在の唐揚げとほぼ同じスタイル。

昭和になって出版された書籍では、1939(昭和14)年

刊行の『洋食と支那料理』(主婦之友社編、主婦之友社)や1958(昭和33)年刊行の『新しい料理 味覚と栄養』(林とし、光文書院)の2冊とまばらであり、注目すべきは、上記の2冊とも、どちらも骨付き肉を使い、中華由来の料理と紹介されている。

鶏肉以外のものを使用した唐揚げとしては、「小鯰の唐揚」と「鯉の唐揚」が1942(昭和17)年刊行の『日常実験料理』に記載があり、小麦粉または片栗粉をまぶして揚げてから、餡をかけたものとし、中華料理として紹介されている。¹⁰

このように唐揚げの“唐”という字から中国起源のものというイメージから唐揚げを使用する、油淋鶏においても中国料理の一種に違いないという認識が醸成されたことと考えられる。

4. 唐揚げ+〇〇のたれ=△△鶏

一般的にみられる油淋鶏は、基本的に唐揚げや竜田揚げにネギだれをかけたものが多い。では他に唐揚げにタレをかけた料理としてどのような料理があるのであろうか。

1) 中国料理

唐揚げに餡やタレをかける料理として、中国(香港、台湾も含めて)には

① 檸檬鶏=鶏の唐揚げ+レモンの搾り汁。(広東料理との説あり)

檸檬鶏はレモンチキンとしてカナダ風、イタリア料理、フランス料理にも存在し、逆に中国では稀な料理である。

② 陳皮鶏=鶏の唐揚げ+オレンジの皮。

陳皮鶏は、中国の湖南省に多くみられる料理である。アメリカ合衆国では、一般的な中華料理であり、オレンジチキンとして北米のレストランで見ることができる。

③ 辣子鶏=鶏の唐揚げ+赤唐辛子

⁹ 川上行蔵他『日本料理事物起源』岩波書店、2006年。

P203。

¹⁰ 渋川祐子 <http://jbpress.ismedia.jp/articles/-/39103>

辣子鶏は、素揚げにして、赤唐辛子を刻んで塩とともにかけたもので四川料理が起源と言われる。

以上の3料理のネーミングは、かけるタレの名前に由来するものであって油淋鶏のように油淋という調理法の名前が使用されていない。この方式に油淋鶏あてはめれば、ネギたれをかけるので、葱油鶏となり、これらとは、起源を異にするものと言える。

2) 日本料理

我が国で唐揚げにタレをかけた料理に、南蛮漬けがある。南蛮漬けは、唐揚げに「南蛮酢」というネギ、唐辛子の刻みを混ぜた甘酢をかけた料理である。南蛮とはネギを使用した料理に使われる言葉で、わが国には調理法を表記した料理は存在せず、唐揚げ+〇〇のたれ=△△鶏は成立しない。

5. メディアの中の油淋鶏

では、わが国のウェブサイト、雑誌、書籍などのメディア媒体では油淋鶏はどの様に説明されているだろうか。

1) ウィキペディアの記述

ウィキペディアでは、「油淋鶏とは、鶏のから揚げに、刻んだ長ネギを載せて甘い酢醤油のタレをかけた中国料理」とある。

さらに、「日本の中国料理店では、“油淋鶏”とメニューに書いてある事例はあまり多くなく、代わりに“若鶏のから揚げネギ香味だれ”などと書いて分かりやすくして提供している店が多い」と記されている。

続けて、「言語の面から鶏は中国語では“チー”より“ジー”の発音の方が比較的近いため、ユーリンジーともいう。また、油は中国語では“ユー”より“ヨウ”に近いため、実際には“ヨウリンジー”に近く発音される。また油淋鶏の種類として、衣付きの油淋鶏

と衣のないものがある。また、骨付きの油淋鶏と骨なしのものがある。日本では、骨なし衣付きの店が多いが、本場中国の油淋鶏は、“骨付き、衣なし”の店も多く、衣の有無で食感が違う¹¹とされている。

衣の有無で当然、食感は違うと思われるが、ここでの問題点はウィキペディアが“本場中国の”と言い切っていることである。ウィキペディア自体、油淋鶏以外の項目においても、その内容に関して若干問題があると思われるがその確証ある根拠は示されていない。

2) 安久鉄兵は『唐揚げのすべて』

唐揚げ研究者(?)の安久は上記本の中で、唐揚げについて「中華料理のメニューでは、“油淋鶏”となります。漬け込みに日本酒でなく、紹興酒を使い、仕上げにタレをかけ細ネギを振るのが特徴です¹² (p56)と紹興酒を使う＝中華料理という単純な著者の思い込みで表現されている。

3) グルメ雑誌『dancyu』

『dancyu』 2012年5月号、西部るみ「知らなかった本物の油淋鶏」

この記事の見出しは、「大きな鶏の唐揚げに甘酢ダレをたっぷり。これが油淋鶏だと思っていた人は多いはず。日本の食卓を席卷する“唐揚げ・甘酢油淋鶏”は日本本来の油淋鶏にあらず！」とある。

中国料理の研究者と称する西部は、「油淋とは、中国料理における加熱処理を表した言葉です。まずは、食材をゆでる、または蒸すといった加熱の手順を踏んでから、低温の油を回しかけながら、時間をかけて揚げていくというもの。鶏やあひる、鴨などに多くみられる調理法です。」¹³とある。この一度ゆでてから(蒸す)揚げるという手順は、上記の井上『中国料理

¹¹ 同上。

¹² 安久鉄兵『唐揚げのすべて』中央公論社、2015年3月。P56。

¹³ 西部るみ『dancyu』プレジデント社、2012年5月号。P108-P111。

用語辞典』の「油淋とは料理の仕上がり時に油をかけた料理法」と明らかに矛盾している。また、著者のいう日本本来の油淋鶏についての説明は皆無である。

4) 1969年.2,3月号の『別冊NHKきょうの料理』中国料理鶏の丸揚げ(油淋鶏)、卒業祝いにとというサブタイトルを付けて油淋鶏を紹介している。料理法として、ひな鶏を丸のまま1羽を油淋したものとし、1羽丸ごと油をかけながら揚げる方法が紹介されている。しかし、35年後の同じ『別冊NHKきょうの料理』14では、中国風鶏のからあげ(油淋鶏)というタイトルで、定番のから揚げにごま油とねぎを絡めれば、これだけでたちまち中国スタイルと変わっており、いつのまにか、唐揚げ料理の一種と化している。

5) JBPRESS 食の研究所 渋川祐子「空揚げ」か「唐揚げ」か・・・?
食文化研究家の渋川祐子は、「中華料理には、炸子鶏(ザーツウチー)という、からあげに似た食べ物がある。これは、北海道のご当地からあげ「ザンキ」の語源にもなったとされる料理だ。だが、中国では、炸子鶏より、ネギを混ぜたタレをかける油淋鶏のほうが一般的だ。」とある。¹⁵

以上のように、わが国のメディアでは、油淋鶏=中国由来の料理と説明されている。調理方法に関しては、『きょうの料理』にみられるように1969年の時点では、鶏1羽を揚げていたものが、36年後の2004年にはいつのまにか、唐揚げを利用した料理に変化している。

時系列でまとめてみると、

1969年 きょうの料理 鶏1羽+たれ

空白の36年

2005年 きょうの料理 唐揚げ+たれ

2012年 dancyu 唐揚げ+たれ

となり、2004年に調理方法が、鶏1羽を揚げていたものから唐揚げを使用するようになり、上記の“空白の36年”において油淋鶏が変化したものと推察される。この36年間に発行された料理雑誌、メディア、料理店のメニューなどをさらに精査する必要があるものの、いかなる理由で油淋鶏が変化したかを解く鍵になると考える。

6. 中国での油淋鶏

1) 中国メディアでの油淋鶏

中国のメディアでは油淋鶏の扱いは、中国版クックパッドと言われている下厨房では、鶏肉料理、家常料理(いわゆる家庭料理)いずれの範疇においても油淋鶏のレシピは出てこない。¹⁶

しかし、徐海京主編の『中国美食大典』¹⁷には、“油淋鶏”の項目があり、鶏1羽を丸ごと油を回しかける(=油淋)の方法で調理するとあり、油淋鶏が中国に実在する料理であることがわかる

次に、中国の古典書には記述があるのか・

① 林洪の『山家清供』(南宋時代の料理書)には何ら記載がない。

② 元闕名撰『居家必用事類全集 飲食類』(明の時代)にも記載がない

③ 『齋民要術』(農学書)(532-549)いずれも記載がない。

¹⁴ 『別冊NHKきょうの料理』NHK出版。2005年5月。P36。

¹⁵ <http://jbpress.ismedia.jp/articles/-39103?page=4> (2017年5月10日アクセス)

¹⁶ <http://www.xiachufang.com/> (2017年2月23日アクセス)

¹⁷ 徐海京主編『中国美食大典』華夏出版社、2000年3月、北京。P378-P379。

このように中国のいわゆる古典書の中には、油淋鶏に関する記述は見られない。

また、清の時代に書かれた、袁枚の『随園食单』¹⁸には、油淋鶏という項目は見られない。油淋鶏に類似したものとして、生炮鶏（ショッパオチィ）という料理が記載されている。これは、小さいひな鶏を小さく方塊に切り、醤油で下味をつけ、食べる間際に取り上げて沸えた油の内に入れて揚げ鍋をおろし、また火にかけて揚げる。続いて3度揚げ器に盛って酢、酒、つなぎ粉、葱のみじん切りを用いてこれに噴する（熱い油で瞬間的に注ぎかける）とあり、唐揚げ+タレ=△△鶏の変化形と言えるであろう。

2) レストランメニューの油淋鶏

では、中国や台湾のレストランに油淋鶏は存在するのか？鹿港小鎮（台湾料理のチェーン店）のメニューには、油淋鶏が存在する。¹⁹しかし、その内容は、白切鶏（鶏肉の蒸したもの）にネギ油をかけネギを添えたもので、唐揚げは使用されていない。このメニューがいつ頃から提供されたかは不明であるが、蒸し鶏+ネギタレ=油淋鶏という通常とは異なるパターンとなっている。



鹿港小鎮（台湾料理のチェーン店）の油淋鶏
ネギのタレはかかっているが、唐揚げは使用されてい

ない。（筆者撮影）

7. 変化する油淋鶏

“恋する中国”というウェブサイトの中の中華料理大全の項目に油淋鶏があり、「油淋鶏とは、油をかけて調理した鶏肉料理のこと。本来は鶏を丸ごと、衣をつけず、皮をパリッとさせるように、油をかけながら作る鶏肉料理。しかし、最近では、中華料理店でも本来の油淋鶏を作る店は少なく、鶏肉に衣をつけ、唐揚げのようにして作った鶏肉に甘酢などをかけたものを油淋鶏として出す店が多い。」としている。²⁰

家庭料理のレシピ集として日本の多くの家庭で用いられているクックパットのサイト²¹では、油淋鶏のレシピが125,000件以上掲載されており、いかに我が国の家庭料理の中でポピュラーな料理であるかが推察される。レシピの内容に関しては、大多数が、唐揚げにネギだれをかけたもの、唐揚げ+ねぎタレ=油淋鶏である。

また、グルメサイトの食べログにおいては、油淋鶏をメニューとして提供している店舗は、5560件ヒットする²²。その中心となるのは、所謂、“街場中華”といわれる中華料理店と居酒屋のサイドメニューとして提供されている。メニューの多くは、やはり、唐揚げに葱のタレをかけたもの、唐揚げ+ねぎタレ=油淋鶏である。

以上のことから油淋鶏は、本来、
鶏1羽+油をかけまわしながら揚げる+ネギタレであったのが、いつのまにか（上記空白の36年）において
鶏の唐揚げ+ネギタレという材料の簡素化及び調理法の簡便化によってアレンジされた料理に変容したとも言える。

¹⁸ 袁枚『随園食单』岩波書店、1980年1月、P115。

¹⁹ 2017年4月17日、筆者訪問（マカオ、ギャラクシーカジノ内店舗にて）

²⁰ <http://www.togenkyo.net/modules/food/268.html> (2017年2月21日アクセス)

²¹ <http://search.yahoo.co.jp/recipe/> (2017年2月21日アクセス)

²² <http://tabelog.com/keywords/油淋鶏/kwdlst/> (2017年2月21日アクセス)

8. おわりに

本稿では、油淋鶏に関してメディアの言説を中心に論じてきたが、果たして本当に中国が起源の料理なのかに関しては疑問が残る。

今後の課題として、

- ① 中国における油淋鶏の起源
- ② 油淋鶏がいつ頃どこで、日本の中華料理店もしくは居酒屋のメニューに現れたのか？
- ③ “空白の36年”に如何なる理由で油淋鶏が変化したのか？

など、まだまだ多くの解析するべき問題が残る。

張競は、日本料理と中国料理の違いとして、日本では、魚を除いて、動物の形を残さないように調理することを挙げている²³。中国料理の鶏料理では、北京ダックをはじめ、焼き鴨、焼きガチョウ等そのままの形で調理されることが多い。この観点からみると油淋鶏においても、当初は鶏1羽を使った料理であり、

ネーミングの点からも中国起源の料理である様に考えられる。しかし、現在、わが国における油淋鶏は、中国風や中華風という名前をつけて、その体裁を装っているアレンジされた中華となっている。

日本や欧米、東南アジアなどの諸外国においては、中国には存在しない「オリジナル」の中華料理が存在する。日本で食べる中華料理と中国で食べる中国料理（中国菜）との差異を感じる事が多い。中華丼や冷やし中華は中国にはなく、日本風にアレンジされた“ジャパニーズ中華”料理である。

油淋鶏は街場の中華料理店や居酒屋メニュー、家庭料理におけるお弁当、簡単夕食に多く見られるのは、料理提供のスピードの必要性から簡略化され、アレンジされたものと考えられる。我が国独自の混在した食文化を楽しむことは有意義なことである。

最後に資料の収集にご協力いただいた、慶応大学文学部の鈴木美喜女史に感謝する。

²³ 張競『中華料理の文化史』筑摩書房、2013年6月、P48

看護教育における創造性・論理的思考力育成方法の考察 —プログラミング教育を用いることでの可能性について—

草野 純子
日本国際情報学会

Study on creativity in nursing education and logical thinking ability training method

—use the programming possibilities—

KUSANO Junko
Japanese Society for Global Social and Cultural Studies

Thought process in nursing care becomes critical reasoning. However, fostering logical thinking ability remains as a challenge. Programming education, develop logical thinking and imagination in the movement from low age happening at home and abroad. You can incorporate nursing education overview education programming, there are discussed. Suggests that for programming education on its structure similar to the thinking process of the nursing assessment in integration of information gets easier. Also, found out that can result in improved capacity for programming education with important creativity by combining knowledge and knowledge for nurses to care for people with different values, the new values to create the ability to increase that.

1.はじめに

看護学教育において、看護過程とは対象の看護の必要性を認識し、対象に必要な看護を系統的に計画し、実施・評価する思考のプロセスである。この思考のプロセスにおいて筋道を理解し、その能力を習得するために看護過程は必要な科目である。この思考過程は看護実践のための方法論の骨子である最も重要な科目といえる。この思考過程を実践する上で論理的思考力は重要になる。しかし、思考力を育成・向上させるような教育は難しく、看護過程のように思考過程を学ぶ講義・演習を苦手とする学生は多い。教員も抽象的な思考過程の講義・演習内容をいかにわかりやすく学生に伝えていくかを試行錯誤しながら行っている。先行研究では、クリティカルシンキングを取り入れた授業取組などの実践報告は数多くある。しかし、教員の中でも論理的思考力の育成が課題としてずっと残っている。

社会に出て、効率よく筋道立てて考える論理的思考力は仕事を円滑に行う上で必要になる能力だとい

える。近年のIT産業等の発展に伴い、社会の様相が大きく変化し、コミュニケーション方法、表現方法、価値観や仕事の方法なども変化している。このような変革の中、プログラミング教育について、オバマ元大統領や有名な経営者は、小さいころからプログラミング教育を受けるべきだと述べている。また、有名な経営者はプログラミング教育を受けているという事実もある。

なぜプログラミング教育を受けるとよいのかを概観し、看護教育に取り入れることができるかを考察する。

2.看護の思考過程

2.1 看護過程について

看護師には科学的で適切な看護問題解決能力が求められている。看護過程は、多くの知識を統合し論理的思考過程を経ることで、対象の抱える看護問題を発見し、問題を解決するための計画を立案していく思考過程である。また、個別的で専門性の高い看

護を提供するために必要な思考過程である。この多くの知識を統合して全体論を考える過程で、多くの学生は困難感を持ちやすい。具体的には、次のようにである。

- ・知識と知識をつなげる
- ・情報と情報をつなげる
- ・筋道をたてて組み立てる

2.2 看護過程のプロセスと課題

看護過程のプロセスは図1のように循環しながら行っていく。看護過程の各項目では、次のようなことを行う。

1) アセスメント

- (1) 情報を収集する。
- (2) 得た情報を、使用する枠組み毎に整理する。
例：ゴードン 11 パターンに分ける
ヘンダーソン 14 パターンに分ける

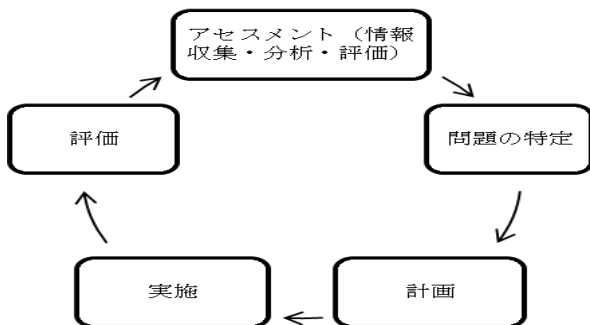


図1.看護過程の流れ

- (3) 情報を分析し、パターンごとに問題があるかを判断する。
- (4) 他のパターンもみて、関連しそうな問題があれば統合する。

【アセスメント時の課題】

- ・情報収集は行えるが、1つの情報だけで分析・判断・評価を行う学生が多い。
- ・複数の関連した情報を選択することや、「考える」「気づく」ことがなかなかできない。
- ・知識不足、関連がイメージできない。
- ・関連図を記載するが、矢印が矛盾しており、筋道立てられていない。

2) 看護計画

- (1) 問題点1つについて1つの計画をたてる。
- (2) 計画の中には、目標（期日までに達成できそうなこと）、介入方法（観察する項目、援助する項目、教育指導する項目）を具体的に、誰が見ても同じ看護が行えるように記載する。

【看護計画時の課題】

- ・アセスメントの時点で、問題の要因等が分析されていないため、どこを良くすればよい方向にいくのかがわからない。
- ・状況を把握できていないため、目標の到達点が大きくなりすぎて、評価できない目標をたててしまう。
- ・問題点、目標が具体的でないため、何を観察して情報を得ればよいかわからず、見るべき項目がでてこない。
- ・援助プランが、具体的になっていない。
例：体を拭く → いつ？ どうやって？ どこで？

上記で述べてきたように、看護援助の要といえる思考過程では、情報の収集、選択、筋道立てられた分析、統合、全体的な視野、細かく分解されてポイントが詳細に記載された計画が必要になる。

言い換えると、得た情報を細かく分解したり、つなげて大きな意味の塊にする時に、どのような意味の塊にするか、知識に裏付けられたイメージが必要になる。この塊のイメージがつかめないために、つないで塊をつくることを難しくしていると考えられる。

3.プログラミング教育について

3.1 プログラミング教育が必要といわれ始めた理由

プログラミング教育が必要と言われ始めた背景として、IT産業界での変革が社会全体に大きな影響を与えている。例えば、マイクロソフトはコンピューターを身近にし、Googleはインターネットの利便性を劇的に変え、コミュニケーションの方法も大きく変化している。携帯電話やインターネットで、数秒で大量の情報を送ることができる。

阿部は iTeachersTV¹⁾ で、マイケル・オズボーン(オックスフォード大)は、「将来の予測が困難な時代になり、今後 10~20 年程度で半数近くの仕事が自動化される可能性が高い」、キャシー・デビッドソン(ニューヨーク市立大学)は、「子供たちの 65%は将来、今は存在していない職業に就く」と述べている。

例えば、インターネットやロボットの導入で、遠隔手術や遠隔診察を行い始めている地域もある。このように仕事のすすめ方の変化は看護や医療においても考えられ、変化する既存の産業や社会の変化に対応できるように、人間自身も変わらなければならないといえる。

そのため、今は存在しない価値観やルールで物事を考え、課題を解決しようとする力や、そうした価値観やルールを生み出せる人を、国をあげて育成しようとしていることが挙げられる。

いいかえれば、変化の激しい予測できない未来において必要になる力は「考える力」であるといえる。

プログラミング教育を行うことで、「多くの知識を持つこと」「知識を見つけ出して関連付ける力」「問題を小さい問題に分解する力」「視覚的に捉える力」「発想力」「一般的な性質を見つける力」「直観力」などが繰り返し自分で考えて作ることで体感しながら身に付くといわれている。また、「アイデアを形にできる」などの直接的な効能のみならず、論理的思考力の強化や問題解決力の向上、創造力の向上、基本的な IT リテラシの習得といった多くの面で良い結果が得られるといわれている。

【実証実験】²⁾

- ・「Logo」の利用で独創性、問題解決能力が向上
(「Logo」は、コマンド入力を伴うプログラムの実行環境)
インドネシアの小学5年生 85名 8週間の期間中に約 10 時間利用して学習した実験。

¹⁾ 阿部和弘、ちえのたね 詩想舎、「思考力がある人にプログラミングを教える」と「プログラミングで思考力をつける」とは違う、iTeachersTV~教育 ICT の実践者たち Vol.88, 作ることで学ぶ なぜ、今、プログラミング教育なのか、
<http://society-zero.com/chienotane/archives/5297>, 2017/5/10.

²⁾ 米田昌悟, プログラミング入門講座—基本と思考法と重要事項がきちんと学べる授業, SB クリエイティブ株式会社, 2016. p 62.

上記の実験結果のように、問題解決能力を向上させる目的でプログラミング教育を行うところが増えているといえる。

3.2 プログラミング教育の動向

2016年4月の産業競争力会議において、2020年から小学校においてプログラミング学習を必修化する方針を安部総理が表明し、第4次産業革命の担い手として子供たちを育成することを述べている。

日本において、中央教育審議会の議論では、「小学校段階における論理的思考力や創造性、問題解決能力等の育成とプログラミング教育に関する有識者会議」が開催され、モデル校での調査・報告がなされている。

小学校段階では、

- ・2017年3月に学習指導要領 告示
- ・2018年4月より先行実施
- ・2020年4月より小学校で全面実施の予定である。

海外では日本より先行してプログラミング教育が開始されており、日本よりも学習方法が進化している。旧来の難しいプログラミング言語等の解説書を用いなくても、4歳の子どもからでも学べるような学習方法や日本語版の学習ソフトもあり、以前よりも学習し易くなっている。

3.3 プログラミング教育で育成したい能力

プログラミング教育を行うことの一般的な社会的イメージとして、プログラマーを育成するイメージが高い。しかし、小学校教育にプログラミング教育を取り入れた目的は、論理的思考や創造性を育成することにある。

ここでいう用語の定義は以下のとおりである。

【論理】

考えや議論などを進めていく筋道。思考や論証の組み立て。思考の妥当性が保証される法則や形式。物事の間にある法則的な連関。(小学館, デジタル大辞泉)

【論理的思考】

物事を筋道立てて考えることを指し、難しいものを単純にし、構造化して誰でもが理解できるよう、明確に説明できる能力、現状の原因と結果をふまえ

て、理想の状態に持っていくための改善策（＝問題解決策）を考えるための思考方法。

【プログラミング的思考力】

機械に理解できる命令の範囲で、目的の仕事（作業）を自動的に順次行わせる手順を考え、記述すること。次の10個の力が大切とされる。

「情報収集力」「検索力」「構成力」「分解力」「具体化力」「視覚化力」「発想力」「推理力」「洞察力」「直観力」

ここで、なぜ論理的思考や創造性を育成することができるのかを、プログラミングの学習方法を概観して考えてみる。

現在の、プログラミング学習サービスの例として、「Hour of code」「Scratch」などのサービスが挙げられる。

いずれもビジュアルプログラミング言語である。ビジュアルプログラミング言語は、ブロックを積み上げる、つなげるようにプログラムを組み立てるものである。そのため、1つ1つの動作のブロックをつなげてプログラムを簡単に作ることができる。組み立てたリストが画面のキャラクターの動きですぐに確認でき、命令を間違えているとスムーズに動かない。キャラクターを動かすには、具体的に細分化した命令が必要である。筋道立てた命令の流れが必要である。そのため、どのように動かすか、背景や配色、キャラクター設定など自由に作れるが、作るには「考える」「イメージする」発想力が必要になる。

作品を制作することで、論理的思考力である、わからないものに対して、これまで蓄積した知識を総動員して理解しようとするような主観的な能力を使い、自分が意図した活動に近づくためにどのような動きの組み合わせが必要かを考える思考過程を行っている。こうしたことが思考過程の訓練になっているといえる。そのため、プログラミング教育で論理的思考力や創造性を育成しやすいと考えられる。

4.創造性について

プログラミング教育を行うことで、創造性が向上するといわれている。なぜ創造性が向上するとよいのかを考えてみる。

4.1 創造性の定義

まず、思考の働きは、「再生的思考」と「生産的思考」に分けられる。³⁾

【再生的思考】

過去の経験、および既知の原理や方法を再生して問題解決しようとする思考で、そこにはまだ新しい解決法やアイデアが見いだされないものである。

【生産的思考】

再生的思考では解決できない場合で、新しい原理や方法を考え出していく思考である。「創造的思考」ということもできる。

しかし、生産的思考はすでに与えられた問題を解決する場合をいい、「創造的思考」は問題解決のみならず、問題そのものの発見をすることを含めている。

創造性についての定義はまだなされていないが、ここでは次のように定義する。

【創造性】

新奇で独自かつ生産的な発想を考え出すこと、またはその能力。知識と知識を組み合わせることで新しい価値を生み出す能力である。

4.2 創造性の研究

創造性について研究を行っているトーランス⁴⁾は、創造性には多くのことが関係していると述べている。1) 創造性を押さえれば、生きることの満足というもの断ち切り、極度の緊張と精神分裂を生じる。

【ある研究 (Hebeisen,1960,112)】

回復途上にあると思われる統合失調症患者の1グループに対して創造的思考テストを実施した。

これらの人々の想像力は、驚くほど貧困であり、考え方に柔軟性がなく、独創性にかけ、新しい問題に対しては、反応がないことを示し、ストレスの下で分裂を起こす統合失調症患者やその他の人々は、最も非想像的、非創造的な人間のグループの一つと

³⁾ ウラン, チチゲ; 弓野憲一, 世界の創造性教育を外観する: 創造性を育成する授業についての一考察, 静岡大学教育学部研究報告, 教科教育学篇, 41, p47-76, 2010.

⁴⁾ E・P・トーランス, 佐藤三郎訳, 創造性の教育, 誠信書房, 1971.

みられる。

ここから、彼らが分裂を起こしたのは創造性が欠けていたからだと考えている。創造性を持つことは、人生の日々のストレスを処理する最も貴重な資質であると述べている。

2) 十分にその機能を活かす人間

学校教育では、その関心を知性の十分な面の開発だけに制限している。しかし、創造的思考にはいろいろな能力が含まれていることを無視できない。含まれる能力とは、問題を検知し、可能な解決法を案出し、それを検証する能力である。そのため、創造的思考に含まれた諸能力が未発達だったり、麻痺させられていたりしたのでは、知的に十分機能しているといえないため、人間の能力を十分に生かすには、知性だけでなく創造性の育成も必要であると述べている。

3) 学力の達成

権威によって教えられるよりも、創造的に学習する方が、多くの事柄をより経済的に学習されること、また人によっては、創造的に学習することを強く好むことが分かったと述べている。

このことは、高いIQを持つ子供は、教師によって望ましいと思われる行動をとり、高い評点を付けられている。しかし、創造性の高い子供はさほど努力をしているようには見えないが、知能の高い子供と同じくらいの学力を持っている。

つまり、教師等による他者から高い評価を付けられていなくても、「遊びまわって」いるように見えても、学習し考えており、高い学力を持っているのである。彼らの傾向として、権威によってよりも、創造的に学習する方が上手く学習が行えるのである。

4) 職業上の成功

創造的思考力が高い人の方が、職業上の高い成果を上げており、その成功に重要であると述べている。

5) 社交上の重要性

民主主義国家は、諸問題を解決する場合に、知的で創造力豊かな方法を用いない時にのみ崩壊する。(ソクラテス)

このように、創造性は多くのことに関連している

といえる。

イギリスの教育学者 ケン・ロビンソンは、「学校教育は創造性を殺してしまっている」という講演の中で、今後必要になるのは創造性だと述べている。

この講演の中で、ジリアン・リンの事例を述べている。

彼女は「キャッツ」や「オペラ座の怪人」の振り付けをした振付師であり、1930年代 ADHD（注意欠陥多動性障害）で精神科を受診した。そこで、医師が、「彼女は病気ではなく、ダンサーだ」と言い、母親にダンスを勧めた。その後、感動を生む作品をいくつも創るまでになった。

当時は ADHD の概念はなく、他の医師であれば、多量の薬を渡されるだけであつたと思われ、今ある作品を目にすることはなかったかもしれない。

4.3 創造性の育成の必要性

社会というものは、概して創造的に思考する人、特にそれが若い人の場合、その人に対して辛くあたるものである。

皆とは違う価値観、行動をすると、その価値観が自分や現在の社会的価値観とは違うという理由だけで、低い評価を与えることが多い。学校教育などでは、ある程度の強制力をもって、皆が同じ考えを持ち、行動するように教育を行うという規範があり、そこから脱することは難しい。上で述べたように創造性を育成する行為とは逆の教育になっている。

こうした教育を受けた人が増えると、新しい考えは起こりにくくなる。新たなアイデアはなく、開発しようという意欲もなくなり、知識は持っているが、つなげて発展させることができなくなるため、産業の発展は見込めなくなることが考えられる。

また、トーランスが述べていたように、現在のようなストレス社会において、ストレスを発散できず、うつ病や統合失調症のような精神疾患を抱える人が増加することも考えられる。

最近起こっている事件（いじめ、すぐにキレる人、殺傷事件、自爆テロ等）も、創造性に関連した事象だと考えられる。

このように、創造性は人の精神状態を安定させることや、その人の能力を発揮させることや仕事の成

果を上げるなど、多くの事に関連しているため、育成が阻害されることによる弊害も大きいといえる。ゆえに、多様性を認め、創造性を育成することが今後重要になることは、今まで述べてきたとおりである。

5.看護と創造性

ここでは、看護と創造性は関連があるのかについて考えてみる。

看護援助は、その技術が対象の個々の状態に合わせた方法で行う必要がある。個々の状態は様々であり、何通りもの方法を考えて実践していく。看護技術を学生に教える時に、技術の考え方として、「technic」「skill」「art」の3つの考えがあることを挙げる。

「technic」は技術を達成するための手法、技法で、科学的根拠に裏付けられた手順などで、他者に伝えやすい内容のものである。

「skill」は経験に基づいて得られる技能であり、熟練者の「コツ」のような経験論であり、熟練者の主観的な感覚の世界のものであり、他者へ伝えるににくいものといえる。

今までは「technic」や「skill」の考えで看護技術を考えてきた。しかし、最近では、看護技術は単なる熟練した技能（skill）ではなく、健康に問題があるために生じる日常生活上の苦痛や不便さを解決するために患者と共に考え、支援することを意味し、個々の患者を取り巻く様々な環境とその変化に耐えうる臨機応変性のあるものでなければならないとしている。

そして、必ずコミュニケーションを介して、患者—看護師間の関係をとおして提供され、相互関係の中で実施されることから、「art」であるともいわれる。「art」は技術を人の生活に生かすことに近く、「technic」や「skill」を包含し、千差万別の状況に応じた技術を繰り広げるために、既存の知識をつなげて考えて行うだけでなく、新しい価値観、考え方、方法の発見をしていくという意味で、「創造性」を用いた技術の提供だと考えられる。

つまり、「ケアリング」の考え方のように、看護者の価値観や考え方、思いが提供する技術に反映され、

表現され、対象の感情の変動を起こすような1つの作品となり、ただ技術を提供するだけでなく、患者—看護師間での新しい価値観を生み出し、相互成長させるものという部分で創造性が用いられていると考える。

それ故に、看護と「創造性」は深く関連し、「創造性」の育成は大変重要で必要なことだと考える。

6.プログラミング教育と看護の思考過程の共通点について

プログラミング教育の思考過程では、目的の行動のために、情報収集を行い、具体的に細分化した命令を行う。その後、筋道立てた命令の流れにするために情報を統合させていく。このプロセスは、看護の思考プロセスに似ている。

プログラミング教育では、このプロセスを、視覚を使い、命令の流れが直接的にわかるため、目的を達成できる内容かどうか分かりやすい。

上手く動かなければ、何度でもすぐに修正をかけていくため、そこで筋道を立てて考えることを行う。

看護のプロセスでは、アセスメントで、情報を分析し、細分化し、看護問題を考える時に細分化したキーワードをつなげるというような作業に、プログラミングのコードをつなげていく作業のイメージで訓練すると、情報の統合がイメージしやすくなり、つなげやすくなることが考えられる。

また、看護計画を立てる部分で、援助を具体的に考えるという作業の訓練としても、プログラミング教育での細分化と統合の訓練で、必要な援助の細分化（具体化）が行いやすくなることが考えられる。

こうしたことは、プログラミング教育の論理的思考力の育成という面で、看護に必要な論理的思考力の育成に生かせると考えられる。

その他に、看護は多様な価値観をもつ人を対象にケアを行うため、個々人にあったケアを生み出す力が必要である。そこには、既存の価値観では対応できない場合もあり、新しい価値観のもとで、新しい援助の方法を考えていく必要がでてくる。そのために創造性の育成が必要だといえる。

プログラミング教育では、キャラクターを自分の思い描いた通りにデザインし動かしていくことから、

人それぞれに違うキャラクターのデザインや動作が生まれる。このように、同じ目的に達成させるためのコマンド入力であっても、そこに至るプロセスは何通りもあるという点で、多様性を学習する機会となると考える。

これらのことから、プログラミング教育を看護の思考過程の訓練にも活かせるのではないかと考える。

7.おわりに

プログラミング教育は、その構造上において看護の思考過程と類似している。そのため、プログラミングで視覚的に全体を眺めながら目的の仕事を考える訓練を行うことで、学生が困難感をもちやすいアセスメント等の情報の統合を行いやすくなることが考えられた。

看護は多様な価値観をもつ人を対象にケアを行うため、個々人にあったケアを生み出す力が必要である。ケアを生み出すためには、物事を筋道立てて考える「論理的思考力」と知識と知識を組み合わせることで新しい価値観を生み出す能力である「創造性」を向上させていくことが重要である。創造的思考を持つことは、看護において、患者の抱える問題をいち早く発見することにつながる。個々で状況が違うため、既存の知識や問題解決では解決できないことも多いため、新しい原理や方法を考え出していく必要がある。そのため、よいケアを実践するには、創造的思考を育成し、持つ必要があるといえる。

プログラミング教育を行うことは、創造性を向上させ、論理的な思考力を向上させるといわれているため、看護教育には必要な事であると考えられる。

【参考文献】

- ・文部科学省, 小学校段階におけるプログラミング教育の在り方について(議論のとりまとめ)平成28年6月16日, 小学校段階における論理的思考力や創造性, 問題解決能力等の育成とプログラミング教育に関する有識者会議.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/122/attach/1372525.htm, 2017/5/19.
- ・総務省, 教育情報化の推進 若年層に対するプログラミング教育の普及推進(平成28年度~),
http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/joho_tsusin/kyoiku_joho-ka/jakunensou.html, 2017/2/14.
- ・ちえのたね 詩想舎, 「思考力がある人にプログラミングを教える」と「プログラミングで思考力をつける」とは違う,
<http://society-zero.com/chienotane/archives/5297,2017/5/10>.
- ・大場みち子, 伊藤恵, 下郡啓夫, プログラミング力と論理的思考力との相関に関する分析, 情報処理学会研究報告, Vol.2015-IFAT-118 No.2, Vol.2015-DD-97 No.2, 2015.3.30.
- ・緒方創, 図形完成テストによる児童の創造的思考力の測定について, 長崎大学教育学部教育科学研究報告, 23, p p 45-55, 1976.
- ・陳郁佳, デザイン表現に対する創造的思考の影響, 日本デザイン学会 デザイン研究 BULLETIN OF JSSD, 2012.
- ・文部科学省, 平成26年度文部科学省委託事業 情報教育指導力向上支援事業 プログラミング教育実践ガイド, 一般社団法人 ラーン・フォー・ジャパン, 2015.
- ・永野和男, プログラミングを通して学ぶ「論理的な思考力と問題解決能力」, 教育情報サイトキューブランド Web,
http://www.cubeland.net/jirei_hm/500016/, 2017/5/5.
- ・永野和男, プログラミング的思考力をどのように身につけさせるか, 教育オピニオン-明治図書オンライン「教育 zine」,
<http://www.meijitoshu.co.jp/eduzine/opinion/?id=20160920>, 2017/5/5.
- ・樋口健夫, 由井蘭隆也, 宮田一乗, TTCT 創造性テストによるアイデアマラソン研修の創造性開発効果の分析, 北陸先端科学技術大学院大学 知識科学研究科,
http://www.japancreativity.jp/images/monograph/w_paper_2013.pdf, 2017/5/19.
- ・杉浦美佐子, 小林純子, 松田日登美, 桂川純子, 高見精一郎, 水野智, 磯本征雄, アセスメント能力開発を重視した看護過程学習支援システム, IT活用教育方法研究 第8巻 第1号, p p 26-30, 2005.

- ・佐藤幸子，青木実枝，井上京子，新野美紀，鎌田美千子，小林美名子，矢本美子，基礎看護領域における看護過程の教育方法—看護診断過程を中心に—，山形保健医療研究，第6号，2003.
- ・総務省，プログラミング人材育成のあり方に関する調査研究 報告書（平成27年6月），
http://www.soumu.go.jp/main_content/000361430.pdf，2017/5/18.
- ・ポール・トーランス著，佐藤三郎，中島保訳，創造性修業学—ゆさぶり起こせ、ねむっている創造性—，東京心理株式会社，1981.

報告論文

(研究ノート : Research Report)

報告論文は審査・査読を行っていません。

毛沢東からの贈り物

—毛沢東崇拜のなかのマンゴー効果—

増子保志

日本国際情報学会

1. はじめに

1968年8月7日付けの『人民日報』は、一面トップに、「最大の思いやり、最大の支持、最大の鼓舞」と「最大」という言葉を羅列し、見出しには、大文字で「我等の偉大なる領袖は、永遠に群衆の心とつながっている。毛主席は外国の朋友から送られた貴重な礼物をそっくり首都工農毛沢東思想宣伝隊のために転送した」

この領袖様が贈った群衆の心と永遠につながっている“もの”、このありがたそうな貴重な礼物とはどのような“もの”であったのだろうか？

2. 追われた紅衛兵

1968年、北京は紅衛兵たちで溢れかえっていた。彼らは手に『毛沢東語録』を持ち、「反革命」の家の搜索を行い、批判大会でそれらを吊し上げて、武力闘争を繰り返した。大学入試の廃止によって学生たちが街に溢れかえり、北京は混乱状態に陥った。

毛沢東は、利用価値のなくなった紅衛兵を北京から追放せんがため「労働者階級がすべてを指導しなければならない」として、労働者毛沢東思想宣伝隊を全国の中高大の各学校に進駐させ紅衛兵の内紛の鎮圧を図った。

毛沢東への忠誠心を競い合うべく反目し合った紅衛兵達に毛沢東は見切りをつけ、労働者毛沢東思想宣伝隊を手先にするため次の行動にでるのである。

3. 毛沢東になったマンゴー

「労働者宣伝隊は学内に入るやいなや、われわれ労働者階級が学校を占領する。毛主席がわれわれをよこしたのだ、とのべた。一人は手に、プラスチック製のマンゴーを持っていた。」ⁱⁱ

毛沢東は、1968年8月5日、時のパキスタン外相アルシャッドハッサンから贈呈された熱帯の果物マンゴーⁱⁱⁱを精華大学に進駐している首都工農毛沢東思想宣伝隊に贈った。北京の労働者達はこのことを「労働者階級に対する最大の支持」と歓喜の声を上げ、街頭でパレードを行い、民衆大会を開くなどお祝いムード満載で大歓迎した。

さらに、このマンゴーを供え物のように恭しく祭壇である「忠字台」に供え、忠誠を誓った。また、労働者達は、マンゴーの前を通る時、一列縦隊をつくり、恭しく一礼をして通り

過ぎるなど、マンゴーは毛沢東そのものの様に取り扱われた。

毛沢東になったマンゴーは、祝賀パレードの先頭になり、メインストリートを闊歩し、厳重な警備をされつつ、「玉座」に安置された。

毛沢東化されたマンゴーは「無上の幸福」のありがたい贈り物として、防腐処理を施されて、全国各地の労働者に贈られた。^{iv}各地では、大掛かりなマンゴーの歓迎大会が開催された。福建省では、約15万人の人々が、マンゴーを先頭に飾り立てた自動車で華々しくパレードが挙行された。

また、福建省では「喜び勇んで黄金のマンゴーを迎え、心は真っ赤な太陽に向かう」という論文^vまで発表された。ここで、マンゴーは太陽の象徴であり、毛沢東の分身、化身であった。労働者達は、マンゴー一切れを大鍋で茹でて、その煮だされたスープを一杯ずつスプーンですくってすすったという。

男女の宣伝隊の面々がマンゴーを取り囲み、それぞれが『毛沢東語録』を手にかざして、歓喜の声を挙げている。中央にいる隊員は、片手を挙げている毛沢東の写真を張り付けたプラカードを持ち、その前にあるテーブルの上にはマンゴーが山のように積み重ねられ、「敬祝毛主席万寿無疆」^{vi}の紙が置かれている。

当時の毛沢東は自分がかつての皇帝のように扱われることを意図していたのだろうか。この写真について、草森紳一は写真の上左端に、中国諜報機関の長であり、文革小組の顧問である康生^{vii}らしき人物が『毛沢東語録』をかざしている姿が写っているとしていることから、この件は康生が仕組んだものではないかと推察している。^{viii}

『百日戦争』の著者である W.ヒントンは、この毛沢東からの贈り物を一つの事件とし、「その夜、ほとんどの人々は眠らなかった。あらゆる人(精華大学に進駐した労働者宣伝隊)が、直接に毛沢東から送られたマンゴーを見たりさわったりしようとした」「マンゴーはガラスのケースに収めて保存され、主要な工場の応接室に展示された。やがてこのマンゴーの模造品がたくさん製造され、精華大学の鎮圧に参加したすべての工場に飾られたのである。まるで宗教的な聖遺物—仏陀の髪とかキリストを磔刑にした十字架の釘とか—に対するのと同様な真の崇拜がこのマンゴーをめぐるまきおこった」^{ix}と書いている。

食べられない聖遺物と化したマンゴーの話は中央宣伝機関の思惑とともに中国全土に拡大し、紅衛兵に代わって労働者階級の宣伝隊がとって変わったことの象徴ともなった。

また、マンゴーは、宣伝隊自身の存在を正当化する“もの”として使用された。紅衛兵が宣伝隊から尋問を受けたとき、宣伝隊員が「いいか！毛主席が俺たちを派遣されたのだ！主席はそのうえ、労働者にマンゴーを贈って下された。食べるのがもったいなくて、ホルマリンにつけたんだ！主席は、俺たち労働者の赤い太陽だ！」^xと述べ、いかにも、自分たちが毛主席の分身だのごとく振舞っていたのである。マンゴーという毛沢東からの贈り物を所有することで一般大衆よりも優位にあると主張することになった。

4. バッジの中のマンゴー

1966年に始まった文化大革命は、毛沢東崇拜を大きく加速させた。『毛沢東語録』や『毛沢東選集』などの紙媒体と並んで、中国人民の左胸につけられ広く普及したのが、毛沢東バッジである。

毛沢東バッジの歴史は意外に古く、そのルーツは、抗日戦争期の延安に求められる。毛沢東の崇拜は文革期に突然始まるのではなく、それ以前からも沢東自身が権力の象徴としてバッジを利用していた。

文革期間、特に1966年～1968年の3年間は圧倒的な多さで毛沢東バッジが生産され、民衆の間に深く浸透した。この時期、中国国内29省市自治区には1000あまりのバッジの製造工場が存在し、バッジの種類は数十万種に及び、80億枚製造された。材質はアルミ、鉄、プラスチック陶磁器、竹、貝など様々な素材で制作され、変化に富んだものであった。

その毛沢東バッジの中にバッジの中央の毛沢東の顔の下にマンゴーが描かれたものが存在する。また「芒果」という文字が刻まれているのも存在する。

毛沢東バッジ研究家の櫻井澄夫によると、櫻井が所有しているバッジに刻まれたマンゴーの数は1個から8個まであり、理由は不明であるが、7個が最も多いとのことである。表面に記された文字には「穎穎芒果恩情深」と書かれているという。[※]制作年は、1968年から69年にかけてで、69年に開催された中国共産党第九次全国大会記念のバッジも存在する。制作した組織は、化学工業部、人民解放軍102部隊、四川省国光革命委員会など多種多様の組織で制作された。

毛沢東バッジは、当時、「付けるべきもの」であり、「持つべきもの」であった。毛沢東バッジは、政治的な場面や状況で意図的に配布され、流布した「もの」であり、共産党的なイデオロギーを強く帯びた政治的な「もの」であり、そこにマンゴーが描かれたことは、マンゴーさえ神格化の対象たりうる「もの」であった。

5. おわりに

一般大衆に向けたこのマンゴー効果のポイントは、

- ① 毛沢東からの贈り物（プレゼント）というサプライズ性
- ② 当時、マンゴーという果物が中国人大衆には「未知の果物」であったという珍貴性
- ③ このマンゴーには数に限りがあるという希少性である。
- ④ マンゴーを毛主席から直々に託されたということから、毛沢東思想宣伝隊の正当性を主張する機能

を果たしたと言える。

文革期における毛沢東崇拜は、『毛沢東語録』、毛沢東バッジ、肖像画などいわゆる毛沢東グッズを利用した。このマンゴーもある意味、毛沢東グッズであり、毛沢東の神格化に寄与したものと言えよう。まさに、たかがマンゴーされどマンゴーである。

（付記）

上記、毛沢東からのマンゴーに関する写真は著作権の関係から当レポートには転載しませんでした。どの様なものか、ご覧になりたい方は下記アドレスからご覧ください。

<http://www.bbc.com/news/magazine-35461265>

(参考文献)

- W.ヒントン、春名徹訳『百日戦争—精華大学の文化大革命—』平凡社。1976年1月。
牧陽一、川田進他『中国のプロパガンダ芸術』岩波書店。2000年9月。
櫻井澄夫『中国・食と地名の雑学考』田畑書店、2005年6月。P212-217。
草森紳一『中国文化大革命の大宣伝』（上）芸術新聞社、2009年5月。P210-219。

-
- i 紅衛兵に対する下放運動。「知識青年が貧農下層中農の再教育を受けるべき」とした。
ii 馮驥才『ドキュメント 庶民が語る中国文化大革命』講談社。1988年12月。
iii 送られたマンゴーの正確な数は不明だが、写真を見ると37個までカウントできる。
iv 『人民画報』1968年10月号。「北京紡績工場にマンゴーが贈られる」
v 李志綏『毛沢東私人医生回憶録』台北、時報文化出版企業有限公司、1994年。p484。
vi 「万寿無疆」（まんじゅむきょう）は封建時代の皇帝に捧げられた言葉。
vii 康生(1898-1975)中央文化革命小組顧問、中国共産党中央調査部長を歴任。
viii 草森紳一『中国文化大革命の大宣伝』（上）芸術新聞社、2009年5月。p211。
ix W.ヒントン、春名徹訳『百日戦争 精華大学の文化大革命』平凡社、1976年1月。p 291。
x 草森同上、p226。
xi 櫻井澄夫『中国・食と地名の雑学考』田畑書店、2005年6月。p216。

研究ノート

香港の水上レストラン

—観光資源としての水上文化—

増子保志 榊マリ子

日本国際情報学会

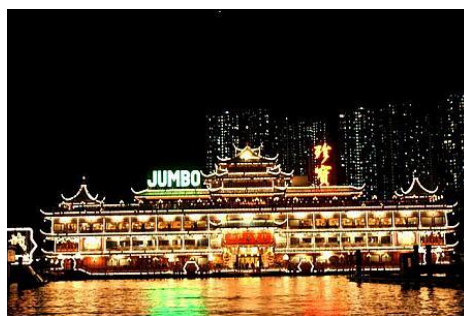
はじめに

香港観光ツアーの定番と言えば「ジャンボ」という香港仔の海上に位置する水上レストラン（酒楼）での海鮮料理の夕食が有名である。旅行の多様化が進んでいるにもかかわらず、現在でも、水上に浮かぶ華やかなイルミネーションとともに、水上レストランでの食事は、香港ならではの雰囲気とグルメが楽しめる観光名所として興味を持たれている。

本レポートでは、この水上に位置するレストランは如何にして誕生したのか？その誕生の経緯を探る。

1) 水上生活者 蛋家

香港島の南側に位置する香港仔は蛋家（ダンガ）ⁱと呼ばれる主に漁業を糧とする水上生活者が居住する地域であった。蛋家は、台風来襲時に被害の受けにくい、入り江に船を浮かべて家を建てて生活していた。この地域は、避風塘（ベイフロントン）と呼ばれ独自の水上文化を構築していた。



観光名所としての水上レストランは、当初はこの蛋家のために作られたものであった。当時の香港では、婚礼は人生最大のイベントとして数日に亘って宴が行われる習慣であった。婚礼になると酒楼や仕出し屋を式場である礼堂に呼び料理を作らせ、披露宴を行った。

水上生活者の蛋家は披露宴に出席する者達の船を連ねて、「歌堂薈（ゴードンダン）」と呼ばれる船上で宴を行った。宴の料理は、陸上の料理屋が請け負っていたが、居住場所である船上には、調理器具を持ち込むスペースがなく、岸辺で調理を行っていた。

当時の宴会は、「八仙九大簋」（一卓につき八名、九種類の料理）がスタンダードであったが、水上では陸上と同じ様に料理を供することが不可能であった。出来上がった料理はまず、新郎新婦の船に運ばれ、そこで出席者の乗る船の数分に小分けして、それぞれの船に運んでいた。それ故、料理は当然のごとく冷めてしまった。

2) 水上レストランの誕生

1949年に中華人民共和国が成立し、外国人観光客は中国への渡航が制限され、香港の観光地としての地位が高まった。蛋家の暮らし向きも徐々に向上し、婚礼が数多く行われる様

になることで、廃船になった漁船を利用した宴会専用船（包辨筵席船）が造られた。ここに初めて船上で宴会可能な船が現れる。

この船は新郎新婦の隣に並び、料理を作るための専用船で、一品出来上がるごとに、隣に停泊している船に渡して、最初の船ごとに小皿に分けられた。結果、料理を提供するまでの時間が短縮され、温かい料理を供することが可能となり、包辨筵席船は蛋家の婚礼に欠かせないものとなった。

さらに、一漁師であった黄兆全が大型船を改造して“全記”という包辨筵席船が誕生した。これにより蛋家の婚礼は非常に便利になった。

さらに、“太白”“寒宮”“福生”“漁利泰”など大型で陸上の酒楼のように礼堂が敷設された船が誕生した。これらの船は、徐々に蛋家の婚礼やその他の宴会の重要を独占するようになり、陸上にあった仕出業者は、商売が成り立たず、姿を消した。しかしながら、婚礼は頻繁に行われるものではなく、シーズンのにも偏りがあるため如何にして商業ベースに乗せるかが課題であった。

3) 「來料加工（ロイリウガーゲン）」システムの採用

香港仔は、当時、魚介類の一大集積地であり、魚市場に新鮮な魚介を求めて足を運ぶ香港人が多く存在した。そこに着目した、黄兆全は、シーズンオフの稼働率の向上を目的として、“漁利泰”を陸上の香港人に海鮮料理を提供する業態の船に改造を行った。当時は、まだ顧客が市場で買い求めた魚介を持ち込みで料理をするレストランは存在しなかった。

香港の海鮮料理屋では一般的となっている「來料加工（ロイリウガーゲン）」という材料の持ち込みシステムを“漁利泰”と“全記”の2隻の船で採用したところ、顧客が大幅に増加した。さらに2隻は、持ち込みだけではなく、船の中に生け簀を作り、客に自由に材料を選択させるシステムを採用した。

4) “太白海鮮舫”の開業

來料加工（ロイリウガーゲン）システムの成功にヒントを得た“太白”の船主である余添客は、1950年に軍用に払い下げられた木製の上陸用船艇を購入し、新たに“太白海鮮舫”を開業した。この船は、各所に中国趣味の装飾をちりばめ、観光客の増加を図った。

しかし、“太白海鮮舫”の改装中に衛生と安全条例を基準とした海鮮舫法令が施行されたことで、法令上の消防規定から船内に厨房を置くことが不可能となり、別途、厨房専用の船を建造することになった。レストラン船は、800人を収容可能で、全長35メートル、三層構造からなり、発電機、倉庫、事務所を下層階に置き、上層二層に客席を設置した。そして、料理を作る厨房船と來料加工の為の生け簀を有した船と合わせて3隻の船を連ねて営業を開始した。さらに、当時としては珍しく、客に象牙の箸をプレゼントするプロモーションが話題となり多くの客が訪れた。

“太白海鮮舫”の開業で“漁利泰”など他のレストラン船は、価格競争で対抗したものの、

苦境に立たされることになった。

また“太白海鮮舫”では、岸からサンパンⁱⁱで客を送迎する蛋家に手数料を払って集客に努めたため、益々、“太白海鮮舫”は繁盛することとなった。こうして、1976年に新たな“珍實（ジャンボ）”という競争相手が開業するまで“太白海鮮舫”の独占時代が続いた。



5) “珍實（ジャンボ）”の誕生

“太白海鮮舫”にその地位を奪われた“漁利泰”のオーナー洗奴は、香港の飲食業界からの出資者を集め「新飲食集団」という企業を作り、“太白海鮮舫”と同じ大きさの“海角皇宮海鮮舫”を開業した。

“海角皇宮海鮮舫”では、輸送手段の改革を行い、“太白海鮮舫”のようにサンパンを使用して客を輸送するのではなく、30~40人乗りの小型汽船に乗船させてレストランまでピストン輸送する方式をとった。埠頭から汽船への乗船は、安定した橋板を渡すことで安全を確保し、サンパンと異なり無料での輸送サービスであることから客には好評であった。さらに綺麗な小姐の出迎えもあり、“太白海鮮舫”を追い越す勢いになった。この2船のせめぎ合いは相乗効果を生み、水上レストランは益々の発展を見た。

香港の大財閥「新世界集団」は既存の2隻の船の2倍の大きさで4層構造から成る超大型豪華船“珍實（ジャンボ）”を建造した。しかし、開業1ヶ月前に死者34名、42名の重軽傷を出す大規模な火災が発生し、船は全焼した。この事件で香港政府は、水上レストラン船を西側の深湾に移動させた。

船が消失したことで、新たな資金の出資者が必要となり、マカオのカジノ王でもある「信徳集団」総帥のスタンレーホーが“珍實（ジャンボ）”の権利を得ることとなった。新しいオーナーを得た“珍實（ジャンボ）”は、3000万HK\$と4年の歳月をかけて、1976年10月に新たに竣工した。3隻体制となった水上レストランは全盛の時代を迎えた。

1980年、「新世界集団」は、“太白海鮮舫”と“海角皇宮海鮮舫”を買収し“海角皇宮海鮮舫”は1997年の金融危機後に売却された。

“珍實（ジャンボ）”は、周辺地域の環境に配慮し、東南アジア最大の汚水処理プラントを設置、船内は不燃性の耐熱材料を使用するなど安全性も考慮したものとした。

2003年下旬に、“珍實（ジャンボ）”と“太白海鮮舫”は大規模な改修工事を行い、今までのイメージを刷新し、両船を合わせて“珍實王国（ジャンボキングダム）”とし、水上のテーマパークレストランとして新たな観光資源として機能している。

新しい水上レストランは2300人の収容が可能で、長さ76メートル、幅22メートル、高さ28メートルで「世界最大の海上の食の府（機関）」と称されている。ⁱⁱⁱ

おわりに

朝鮮戦争後の好景気による新興富裕層と香港へオリエンタルな雰囲気希求する欧米の観光客によって、1960年代に海鮮料理ブームが訪れた。海鮮料理は、素材の鮮度と持ち味を尊ぶ広東人、香港人の味覚と嗜好にマッチしたものであった。さらに、蛋家のジャンク船やサンパンは、その雰囲気を醸成する観光資源として非常に有効なものであった。その中で、水上レストランは、その形態を変えながら長い間香港観光の定番スポットとなり、現在に至っている。

香港独特の水上生活者の文化をグルメブームと結び付けて地域経済の活性化を図ったことや会場にレストランを開業するという発想は、利にさとい「香港人」ならではアイデアである。地方創成云々が叫ばれている我が国も安易な“B級グルメ”や実態の不確かな“おもてなし”などというものに頼らず、地方の文化や特色を生かしてグルメと文化をコラボレーションさせた観光資源の利用を考えるべきである。

(参考文献)

可児弘明『香港の水上居民』岩波書店、1970年1月。

飛山百合子『香港の食いしん坊』白水社、1997年4月。

(写真は筆者撮影)

i 香港仔を拠点とした水上生活者。多くは、漁業や水上運搬業に従事した。現在は香港における観光資源の一つとなっている。

ii 港から比較的低速で安全に人や少量の荷物を輸送するのに適した、全長5m程度の小型船。

iii <http://www.pocketpageweekly.com/feature/16296/> より (2017年5月12日アクセス)

モンゴルの高等教育に求められる社会的機能と役割

－日本の近代化形成過程における経験から－

吉澤 智也
日本ウェルネススポーツ大学

1.はじめに

モンゴルは新憲法公布による建国から 25 年が経とうとしている。この間、民主化と市場経済を推し進め、市場開放から国有財産の私有化、歴史文化といった伝統性の回帰を自由にできるようになった。しかし、その実態は非常に脆い。未だ鉱物資源への期待と関心に依存し続け、利権や汚職、内需のための社会インフラの未整備、就業機会の貧困さからくる貧富差の拡大、治安の悪化という障壁を乗り越えられずにいる。

更に、選挙の度に変わる政権と国民の抱く国家像に擦れ違いが生じ、目指すべき姿が共有し合っていないかのように浮遊し続けている。今は改革が不可欠な時であり、創造という挑戦を推進できるのは、知的好奇心が盛んな若い世代と異文化を知る人材だといえる。その過程では、少なからぬ破壊や矛盾が生じるかもしれない。

混迷が続く 21 世紀、モンゴルはグローバル社会を生き抜く術を育む必要性が求められており、モンゴルの各大学は、これまで試みてきた教育制度・政策を見直す時期に差し掛かっている。

これからのモンゴルの高等教育に求められるのは、国際スタンダードに立った教育制度の確立、学校独自のオリジナリティー（専門教育）の実現である。その実現があつて、浮遊するモンゴル社会から持続的な成長の条件を作るために、現在ある負の条件を打破する人材の輩出が可能となるだろう。

モンゴルが持続的な成長と発展を遂げるためにも、各学校は自らの社会的使命と役割を再認識する時期にさしかかっている。その実現過程では、日本が近代的な高等教育システムを確立するに至った史実が、少なからずヒントになるに違いない。

2. 日本の近代化過程に観る高等教育の確立

日本における近代的な高等教育システムが確立されたのは、明治後期から昭和前期（19 世紀後半）にかけてのことである。

この頃の日本は、優れた人材の登用を積極的に行い、諸外国から知識・技術の専門家を招聘するなど、人材育成に国策として取り組んでいた。その結果、西洋の科学技術や知識を短期間で吸収することに成功し、アジアで唯一、欧米に伍した存在を確立した。

日本が政治や経済、産業、軍事、外交といった面で、近代国家としての地位を確立するに至った時期であり、日本の近代的な高等教育の試行プロセスを検証することは、モンゴルの高等教育の制度・政策を見直すうえで、参考になるものと考えられる。

また、国民全体の知的水準の向上を目的とした初等教育の整備を行ったことで、世界で初めて義務教育を導入した。それに加え、欧米から進んだ学問、技術、制度を吸収するため、高等教育の整備を急いだ。近代的な高等教育制度の導入は、日本の発展に不可欠な要素であり、特に、欧米の進んだ科学技術研究の導入と、国家や社会の官僚機構を担うエリート人材の育成が期待されていた。

明治 5 年、近代化を推進するための学校制度を示す「学制」¹が公布されたことで、日本の教育は新たな一歩を踏み出すことになる。「学制」は、欧米に対抗できるよう国民の教育レベルを高めることを目的としており、身分や性別を問わず、国民皆学を目指すというものであった。

その後、明治 6 年には外国語学校などについての規定が定められ、明治 19 年に「中学校令」²、明治

¹ 1872 年に公布され、日本の近代的学校制度を定めるための法令。

² 1886 年に公布され、近代日本の中等教育機関のうち中学校（いわゆる旧制中学校）を規定していた法令。

27年に「高等学校令」³、明治36年に「専門学校令」⁴といった各種学校に関する規定が確立された。これにより、国が設置した官立学校に加え、私立学校の位置づけが明確化されたことで、日本の学校制度の基礎が確立した。大正7年に「大学令」⁵が公布されると、帝国大学以外の私立の大学が次々と設置され、日本の高等教育システムが確立されたといえる。

なかでも私立大学は、国立大学のなしえない特色ある教育を進めることが本旨であり、実業的(法律、商業、医学、薬学、工学)な教育を目指しながら、国立大学の補完に留まることのないよう人材育成に努めた。この頃の日本は、苦しい財政事情であったことと、中級層の育成を担っていた私立学校に対する政府の統制が厳しかったことから、長い対立と紆余曲折の改革を経て、日本独自の高等教育制度を築き上げるようになった。

これら私立大学の設立には、明治維新後、政府から欧米諸国へと派遣された初期留学生らの多くが関わっていることから、教育への理解と進歩、人材の登用が、日本の政治経済や社会文化的発展の推進に貢献してきたといえる。

日本が短期間のうちに急速な発展を遂げた背景には、近代的な教育の導入と発展を促す、日本特有の環境が整っていたからだと考えられる。それは、近代以前の徳川時代(江戸)での支配階層であった武士だけでなく、農工商の違いに関係なく庶民による、教育熱心さが基礎的な前提条件としてあったからである。

資源に乏しい日本では、唯一の資源である人材育成を教育政策上の重点課題として掲げ、貴重な人材を育てる教育こそが、国の発展を支えるものとの国民的な合意があった。それは、最初の国是であった

「五箇条の御誓文」⁶の文言に出ている。これらが、日本の教育に対する国民的合意形成を牽引したと考えられる。

私立大学は単に個人の利益を優先するものでなく、国の掲げる政策や社会における公共の福祉を実現する機関として、社会的要請に応える、といった認識が強く持たれていた。それを支えていたのは独自に掲げられた「建学の精神」であった。自由で個性豊かな教育活動を展開しながら、多様な人材輩出に繋がっていったのである。「建学の精神」は、公教育を自負した創立者の理念と目的を宣言したものである。

現在に至るも、それが私立大学の公共性を支え続けていると信じたい。

3. 国際標準化と人的資源の活用

日本の近代国家の形成過程において、高等教育が社会進歩の原動力を担っていたのはいうまでもない。その発展が国家にとって大きな役割を果たしてきた。そのため、社会全体が高等教育に求める期待は高まり、これに応えるべく学術研究や専門教育、人材育成、地域貢献といった公共的な性格を強めている。高等教育の使命は、社会全体への貢献であり、私立学校は独自の専門性とカリキュラムを確立することで、その教育の質と学位の保証を実現したといえる。

モンゴルでは、大戦下でありながら1942年にモンゴル国立大学が設立され、1992年の新憲法公布による民主化以降はその数も増した。現在は100以上の大学が設置されている。大学への進学意識が高い一方、その質は十分とはいえず、モンゴルにおける高等教育の在り方、その役割について、政策的に検討する必要が求められている。また、入学者の関心と学ぶ意欲は高いものの、その意義を見出しているかどうかは課題であり、学位取得者の社会的地位にも影響を及ぼしている。

2008年に中初等教育が12年制に移行したことで、モンゴルから海外大学への進学や留学の機会は増す

³ 1894年に公布され、中学校令に基づいて設立された高等中学校を高等学校に改組することを目的とした法令。

⁴ 1903年に公布され、近代日本において、中等教育修了者を対象に高等専門教育を実施した専門学校(いわゆる旧制専門学校)を規定していた法令。

⁵ 1918年に公布され、法制度上における帝国大学と別種の大学を設置した法令。

⁶ 1868年4月6日、明治天皇が京都御所で公卿や諸侯などに対し、政府の基本方針(国是)として示したものの。これによって、日本が世界の文明を取り入れ、近代的な立憲国家として発展していく方向が切り開かれた。

ことになり、今後、国内大学への進学者は減少するのではと懸念が残る。元々、語学力に優れ、異文化への適応が柔軟なモンゴル人は、世界各地に留学の輪を広げグローバルに活躍している。モンゴル政府は海外への留学機会を増やそうと、政府間奨学金の拡大を図ろうとしているが、グローバル人材の育成に熱心な反面、国内における高等教育の質の保証は手つかずのままである。

日本の高等教育の成功が国際水準に適合した教育システムの導入、それを実現するための革新と法整備であったように、モンゴルの成長と発展にも独自の教育政策と人材の登用が急がれる。高等教育をはじめとした専門教育は、内需の乏しいモンゴル産業にも関係しており、中国やロシアへの経済依存、国際機関からの援助依存から脱却するためにも、早急に取り組むべき課題といえる。

現在のモンゴルの高等教育は、ソビエト時代の教育システムを受け継いでいる。そのため、学問を市民に提供するという政府の方針はあるものの、高等教育が中初等教育の延長線と化している。近年、私立学校を中心に、欧米や日本の教育システムを導入する大学もでてきているが、専門性や学術研究には程遠い。

政府の介入が強いモンゴルでは、各大学を司る学長や研究者の方針よりも、その時の政府方針が優先されることがあり、各大学の評価や研究の継続にも影響を及ぼしている。国家として中長期的な教育方針と国際水準に適合する教育政策を検討することは、各大学や研究者、そこで学ぶ者の目的と意欲を掻き立て、教育の質と制度の向上に発展していくものと考えられる。

また、モンゴル人は、世界各地にネットワークの輪を広げグローバルに活躍しているが、その大半は母国に戻ることなく、世界各地に留まっている。既に、総人口の約一割が海外に暮らしているとまでいわれており、ユーラシアを中心とした各地には、エスニックであるモンゴル人が存在していることは、世界の共通認識である。その範囲は、中国やロシア、アジア、欧州と多岐にわたる。

彼らの有する知識とノウハウ、情報網はモンゴルの発展に不可欠な特効薬として効果をもたらすに違

いない。近い将来、モンゴルが持続可能な社会を実現するためにも積極的に登用すべきだと考える。だが、現状を見る限りでは、受け入れるための基盤整備の意欲は、どの政党や機関にもあまり積極性があるとは思えない。

それは、国造りのためのビジョン形成が不徹底であるところからきており、教育における構想力に問題がある。

4. 産学官によるイノベーションの試み

日本は近現代において、二度のイノベーションを実現することに成功している。それは、明治維新によりアジアで唯一の近代国家として発展を遂げたことと、太平洋戦争の敗戦から経済大国へ立ち直るといった高度成長である。その結果、欧米を中心とした国際社会のなかで、アジアで唯一認められたパートナーとしての存在を確立することができた。

時代や地域といった背景は異なるが、モンゴルも日本同様に国家として大きな転換を経て今日に至っている。世界史上に残る帝国を築き、清王朝、ソビエトの支配下に属した苦い経験を乗り越えながら、幾度と独立を実現してきた。

しかし、現在のモンゴルには、10年後の発展を見据えた場合の議論が過熱していない。政府や産業界が何をすべきで、大学が何を担う必要があるのかといった位置づけが不明確であり、結果として、モンゴルの成長を足止めしている。

近年、モンゴルの主要大学は政府の方針と息を合わせる形で、イノベーションを目指した起業家大学作りに力を注ぎはじめているが、目先の技術・経営革新のみを重視すれば、産業界のためだけの大学になる危険性が懸念される。

イノベーションの実現には、産学官の各機関の集積が重要な要素になりえることから、大学に期待される役割は、イノベーションの源泉として基礎研究と継続性の確保、それらを支える多様な知的ストックの形成であり、イノベーションに適合する社会システムを駆動させることだといえる。

その実現に向けて、モンゴルの各大学は特色ある研究分野や専門性を明確化することが求められており、個々の大学が研究成果を社会に公開することで、

政府や企業との連携に発展していく。それが、経済、社会、文化的な活動へと波及し、モンゴルの持続的成長に還元（貢献）されるのだ。

本来、大学には、社会に開かれた場としてネットワークを形成する役割がある。既存の産業や技術、学術分野の関係を越えた連携の場を提供することは、大学自体が創造的空間として活性化する契機にもなりえる。

また、知の人材が豊富にいる大学を有効活用することは、国や産業界にとっても大きなメリットだといえる。その分野での研究に政府や企業が研究費を投入し、大学と一体化して研究や開発を行うことで、人材の育成と確保にもつながっていくのだ。

大学・企業間とのネットワークを緊密にし、教育と研究の交流を促進する必要もある。特色ある教員を出し合うことで、連合体としての特色を発揮するコンソーシアムを築き、さらには、国際的に海外の大学とも交流を行っていく。その実現には、両者を媒介するメカニズムの構築が必要であり、そこには政府のしかるべき部署も参画することが必然的に求められる。

モンゴルがイノベーションを単なるスローガンで終わらせないためにも、政府や産業界は教育への先行投資を積極的に行う必要がある。日本の近代化を牽引したのが教育への投資であり、近代技術を中心とした諸知識の吸収が経済活動の自立化を実現したように、現在のモンゴルには教育への理解と投資が求められている。各大学もまた、社会の需要に応じた分野横断的な研究への参画と連携を目指し、積極的な情報公開に取り組み、知・人的交流の拡大を図らねばならない。

モンゴルが産学官連携によるイノベーションを目指すなかで、大学が産業界のための教育・研究機関という位置づけにならないことを願っている。

5.おわりに

明治維新による鎖国の解除は、当時の日本を国際社会というグローバルな場に投げ出し、急速な近代化を目指す機会をもたらした。その一連の過程のなかで、日本の高度な教育システムが形成されたことはいままでのない。日本は、徳川時代（江戸）から

高水準にあった国民教育の普及や、官と私の教育に対する強い概念の存在、国際社会に対応するために官民を挙げて努力をしたことで、その成功を手にとることができた。日本の近代化は、偶然の産物ではないことを示したといえる。

今日、グローバル化の進展は高等教育の場において、優秀な教員や学生を国境を越えて獲得しようとする国際競争をもたらし、あらゆる課題の解決に携わる機会を創出した。そして、知識が現代社会の資源であることはいままでのなく、その知識を行動に移し社会に成果をもたらすことこそが、イノベーションの実現という成長への挑戦なのだ。

迷走を続けるモンゴルには、高等教育の使命を担う大学自らの絶え間ない変革が必要であり、浮遊するモンゴル社会を打破すべく、国公私立の各大学が英知を集め社会へ還元（貢献）する時期にきている。

そうした意味で、社会や政府と大学との間を媒介するメカニズムの構築が急務であり、大学自身も社会的要請に応えるべく、自らのポジションを確立していく必要性が求められている。

モンゴルにおける高等教育の在り方を見つめ直すことは、教育と研究に加え、社会への貢献という第三の機能への期待に応えるものとして、モンゴルが持続的成長と発展を遂げるための重要な要素になりえるだろう。その実現過程では、日本が近代的な高等教育システムを確立するに至った史実が、少なからずヒントになると信じたい。

日本が自らの手で近代化を成功させたように、モンゴルも自らの努力により時代の障壁を乗り越え、未来を切り拓いていくことが求められている。ただ、モンゴル自身がグローバルな21世紀をどう歩もうとするのか、その一連の過程のなかで如何なる位置に立とうとするのか、という認識と戦略がなければ、国の運命を担う人材の育成は叶わない。今は、その議論が先なのかもしれない。

それは、現代日本も同じと言えるが、日本の高等教育を取り巻く状況が危機的な様相を深めていることに、多くの者が気付いているかは疑問である。

参考文献

斎藤泰雄「近代国家形成期における高等教育の構想

と整備 - 日本の経験 - 」、『国立教育政策研究所紀要
第144集』

工藤市兵衛「私立学校法と私学の自主性と公共性」、
『愛知工業大学研究報告 第28号』

武田秀司「私立高等教育機関関係法制度の変遷 - 自
校史編纂の糧として - 」、『詩論公論の場 Vol140』、地
域科学研究会、

[http://chiikikagaku-k.co.jp/kkj/opinion/40/40
.html](http://chiikikagaku-k.co.jp/kkj/opinion/40/40.html)

長谷川渡「日本の私学と「専門学校」の概念」、『ア
キューム vol.9』

池田憲彦「近代日本の私学経営における「学是」の
形成 拓殖大学の事例から」、高等教育問題研究会

池田憲彦「近代日本の大学人に見る世界認識」、自由
社

記憶の経験値として生きるソフト・パワーの展開

—21世紀のパクス・モンゴリカを求めて—

吉澤 智也

日本ウェルネススポーツ大学

1.はじめに

モンゴル国はユーラシアの内部に位置する小国である。領土の面積はともかく、人口は約300万人。資源大国と言われているものの、国内消費用ではなく、外国の需要に応えるしかない。それも、内陸国であることで、輸出対象も限られる。

そうした地政学上の制約にあって、モンゴルが独自の存在理由を21世紀の地球社会において確保できるのは何か。それは、その歴史に示されている経験知だと言える。人類史で初めて世界帝国を築いたのは、ユーラシアを中心にアジア・中東までを制覇したモンゴル人である。この史実に含まれている経験知の意味を系統立って知ると、これからの地球社会が必要とする多くのものを発見できる。

それを知ることにより、ハードな環境面での立国条件の不利さを、有利に転換できるかもしれない。歴史に秘められてきたモンゴルの英知を発掘して、メンタルな資産にすることは、モンゴルが地球社会に向けて貢献するソフト・パワー¹（発信力）の糧になると考えられる。

2. モンゴル人アイデンティティの台頭

モンゴルは90年の民主革命²以後、自由化政策によって多くのモンゴル人が地球上を行来できるようになった。既に、総人口の約一割が海外に暮らすとまで言われている。この数字は、新生モンゴルが四半世紀経った成果のシンボルと言っても過言ではな

い。それは、未来に向けてパクス・モンゴリカ³を展開する環境条件の一つである。

加えて、モンゴル域外には、エスニックであるモンゴル系諸民族が存在していることは世界の共通認識である。中国やロシア、アジア、欧州と広範囲に広がっている。さらに、鮮明な自覚はなくても、モンゴル系と看做される人々は、旧モンゴル帝国の版図内に多数存在している。彼らが、自分の一体性をモンゴルにあると認識するのは、共通の記憶を共有する機会に接した瞬間である。

しかし、共有してはいたはずの記憶は、旧モンゴル帝国の拡散以後、近代に入り見失われてしまった。現在、モンゴル人のアイデンティティの知的な裏付けは、十分とは言い難い。それは、世界史におけるモンゴル文明史について、系統だって収集した上で思索し、それに触れる機会が損なわれてきたからである。

特に、モンゴル国内での文明史研究は、ソビエト時代に知識人への粛清と合わせて衰退したと言える。当時のモンゴル人民共和国の使命は、ソ連を中心としたマルクス・レーニン主義の原則に則り、社会主義国家と未来へ向けた共産圏の確立であった。そのため、モンゴルの教育機関で使用されていた世界史科目の教科書は、ソビエトからの翻訳版である。ソ連近代史を中心とするイデオロギー教育に重点が置かれたことから、自国の歴史的発展性や世界史観を学ぶ状況下になかったのだ。

1990年の民主革命までの近代モンゴルは、諸国民の平等を謳うソビエトの衛星国という制約から、モンゴル史の人類史への貢献を学術的にも提示するこ

¹ その社会のもつ文化や政治的価値観などを背景として、他国から理解、信頼、支持、共感を得て、国際社会で発揮される影響力。

² 1989年11月末から、知識人・学生を中心とした反体制勢力モンゴル民主連盟による民主化運動。

³ 13世紀から14世紀に渡りユーラシア大陸を支配したモンゴル帝国の覇権による平和で安定した時代。モンゴルの平和。

とは、民族主義的な偏向と看做されていた。だが、民主革命以後、言論と報道の自由が確立されたことで、これまで外圧により封印されていた歴史認識が開放されるようになった。しかし、こうした環境の変化は、モンゴル人アイディンティティの台頭を意味するには、未だ至っていない。それは、彼ら自身が自らの主体性を確立できていないからかもしれない。

3. 21世紀の新たなアイディンティティを求めて

現代のモンゴル人には、帝国の開祖であったチンギスハンへの憧憬はある。しかし、史実に即して、彼や、帝国の整備をした先人たちが何故に偉大であったのかを、史実として知る者は少ない。専門家は別であるが、その専門家も、近代ではオリエンタリズム⁴の影響で、優良な歴史認識を保有していないと思われる。

13～14世紀、さらに15世紀を含めての帝国時代に形成されたモンゴル人アイディンティティの意識は、人種的な枠をはるかに超えて広がった。その広がり方の調査研究は、過去の出来事を発掘するだけに終わってはならない。それは、帝国の反映という史実が21世紀の地域間外交と国際政治、経済や環境など、現代におけるグローバルな諸問題を考える道標になりえるからだ。それが、モンゴル人の新たな自信にもつながっていく。

モンゴル帝国は世界に平和と安定をもたらした時代であり、経済圏の確立、紙幣と租税の導入、宗教の自由というように、その統治能力は優れたものであった。まさに、グローバル化の先駆けである。それが、パクス・モンゴリカなのだ。しかし、現代のモンゴル人にはトランプ現象に著しい反グローバリズム的な思考を持ち合わせる者も少なくない。

この頃、ユーラシア大陸の大部分がモンゴル帝国により統一されたことで、必然的に陸路による物流が活発になった。帝国領土内の様々な人々が自由に行き交う時代が到来し、モンゴル政府は関税を撤廃して商業振興を推進した。その結果、モンゴルに征

服されなかった地域（日本、東南アジア、南アジア、中東、北アフリカ、ヨーロッパ）も、海路を通じて交易ネットワークに取り込まれ、経済活動は更なる発展を遂げることができた。

モンゴル帝国のもたらした果実の正当な評価を実証的に明らかにすることは、世界史的にモンゴル帝国がいかに画期的で生産的な要因が多かったのかを鮮明にするものである。そこから、モンゴル系であったことの誇りが台頭する。その記憶の共有は、多くの新たな関係意識をもたらしてくれるに違いない。そうしたボーダーレスな連携性の台頭は、記憶という新たな共同体意識の形成に広がるものと考えられる。

それは政治的というより、歴史文化的なものであることから、国家との関係で対立的な要因にはならない。だが、その共鳴と波及効果は、モンゴル国にとって計り知れない影響力（ソフト・パワー）を秘めることになる。

4. 記憶として生きる経験値からの展開

地球上は100年単位で大きく文明的（時代）な進歩を遂げている。その大半が四半世紀の間に決まってしまうことは、過去の史実から読み取れる。しかし、現代の常識を当たり前として捉えている今日、何故、当たり前なのかを見つめ直すことが重要である。その史実を考察することができなければ、新しい時代を切り開くことに結びつかない。

日本は敗戦から60年で世界第2位のGDPを実現したが、どうしてそうなったかを考えてみるべきである。日本の近代化形成過程に眠る経験値、それが、今後の日本の成長に大きなヒントを導き出してくれるかもしれない。

同じように、モンゴルは民主化して27年の年月を歩んでいる。その実態は、未だ浮遊した国家のように迷走し続けている。今後のモンゴルの成長を考えれば、近代以前の史実を考察することは不可欠である。今のモンゴルは、古き悪しき史実は歴史観から葬ろうとする傾向が強い。それは、ソビエトや清王朝の時代である。彼らにとっての史実は、この27年間という短期間（近代）なのだ。チンギスハンに憧憬するわりには、実に淡泊な歴史観と言える。

⁴ 東洋研究または東洋趣味を意味する概念。

モンゴルは地政学的に中露の狭間に置かれ、常に両国の影響下で生きてきた。そして、その両国によって国が分断されるという苦い経験を乗り越え、遂には独立を達成することができた。21世紀の地球社会では、その枠を超えて、世界とどう向き合うかを考えることが重要になる。現政権による第三の隣国外交⁵には、そういう意味合いが含まれていたのかもしれない。しかし、歴史的評価から生まれた発想であるかは、些か疑問である。

その実現には、モンゴル人自身が自らの主体性を求め、その史実と向き合うことができるかにかかっている。世界共通とも言える人類の記憶（史実）に眠る、その成功要因を経験値として現代に活かせれば、新しい時代を開く道標になるかもしれない。その実現過程では、現代に生きるモンゴル系諸民族の遺伝子（ルーツ）を辿ることが重要な鍵となる。

4.おわりに

文明が誕生して以来、これまで多くの国家が誕生してきた。そこには、友好だけでなく、衝突や裏切りも存在している。そのため、国家同士の関係は歴史の大きな要素として、様々な側面から考察され続けてきた。国家はなぜできたのか、国家はどのような特質を持っていたのかなど、現代の国家統治に活かすことができる重要な手掛かりとなるからだ。

モンゴル帝国は、ユーラシアからアジア、中東、ヨーロッパの隅々に至るまで、人・モノ・金・情報・技術・文化の大交流を実現している。この大帝国は、現代では共同体（統合）である。その実態を考察することは、これからの国際関係の在り様や、現在の政治・経済の構図、民族・宗教問題に対し、重要な参考となりえる。

当時の繁栄（パクス・モンゴリカ）が現代に活かされるならば、政治的秩序、東西間の経済交流、信仰の自由に象徴される多文化共生というように、現代が抱える多くの課題に対し、大きなヒントをもたらすに違いない。そこに至るまでには、現代モンゴ

ルが自らの主体性を、どのような歴史観で捉えていくかに影響される。

モンゴルが21世紀の地球社会のなかで、自らの存在と価値を示すことを考えているのであれば、人類史の記憶に残る経験値とルーツを辿るべきである。世界史上に確実に残っている真実を追求することは、モンゴル国としての使命だからだ。その成功要因を考察することができれば、それが、モンゴルのソフト・パワーとして大きな効力を持つことを意味する。

参考文献

- 杉山正明「モンゴルが世界史を覆す」、『日本経済新聞出版社』
杉山正明「遊牧民から見た世界史—民族も国境もこえて」、『日本経済新聞社』
Ts バトバヤル「モンゴル現代史」、『明石書店』
ワルター・ハイシヒ「モンゴルの歴史と文化」、『岩波書店』

⁵ 中国、ロシアのどちらにも偏らず、バランスのとれた関係を構築する多元的な外交方針。日本や欧米を刺す。

情報と文化に基づく授業の構造化モデル

符儒徳

開智国際大学国際教養学部

Structured Model for Classes Based on Information and Culture

FU Ru-De

Kaichi International University, Faculty of International Liberal Arts

This paper deals with the structured model that is built by considering the essay which was done on the International Information as paradigm shift with the irreversible globalization, and putting "teacher" and "student" in principal axis, for classes based on information and culture. It also mentions the relevance of components considered from viewpoint of cooperative learning theory.

1.序論

本稿では情報と文化に基づく授業の構造化モデルの構築を主な目的とする。その背景については以下のことが考えられる。

グローバル化によって、人と人との関連性が多様化し、社会は複雑化している。近年、学生がグローバル化した社会の中で生き抜く力を身につけさせるために、大学教育の改革が強く求められている。同時に、学生はこれまで以上に多様な見方や考えを持つことや他者と協力して課題を解決する力が求められている。

しかし、日本の18歳人口の減少により大学全入時代が訪れようとしており、それに伴うかのように学習に対して受動的で、学習意欲の低い学生は増えてきている⁽¹⁾。それに、グローバル化の深化により、同じ学習環境のなかでも、様々なバックグラウンドをもつ学習者が存在しており、ニーズが多様化している。こうした問題と多様化への対応策がアカデミックの場と社会に強く要請されている。

このように、社会環境の変化により、学生に求められる能力も変わり続けることが不可避となり、教育の在り方も変わっていかなくてはならない⁽²⁾。また、十人十色の個々の才能や個性に合わせて多様な教育を提供していくことも必要である⁽³⁾。

一方、タブレットやスマートフォンなどの普及によって、同じ場所にいなくとも、人とつながること

ができるようになったことで、学習者は情報を共有しながら、ネット・コミュニティ内で互いに励まし合い、アドバイスし合うことにより学習のモチベーションを高め、継続しやすくする要素があることから、情報通信技術（ICT）を用いて何か新しいことができる可能性を示唆している⁽⁴⁾。

こうした中で、注目を集めているのがアクティブ・ラーニング（Active Learning）⁽⁵⁾と反転学習（Flipped Learning）⁽⁶⁾であると思われる。アクティブ・ラーニングは、学生の能動的な学びを促進する教授方法と定義されている⁽⁷⁾。アクティブ・ラーニングは、講義を聴くだけの授業に比べて知識の定着率や活用する能力を高める効果があると期待されている。そして、反転授業（Flipped Classroom）とアクティブ・ラーニングを組み合わせればさらに効果的な授業形態になる可能性が高いと期待される⁽⁸⁾。実際、反転授業を組み合わせたアクティブ・ラーニングの取り組みなど多数の事例が報告されている（e.g.私立大学情報教育協会 2015）。

ところが、「反転学習は家庭や学校外の学習環境と学校とをつなげるため、国や文化が大きく影響するので、新しい取り組みを行う際にはそこで培われてきた土壌を考慮する必要がある」⁽⁹⁾と指摘されたように、新しい取り組みを行う上では文化の影響は無視できない。このことは重要である。

また、教育課程研究会（2016）によれば、「この指

導法を実践すればアクティブ・ラーニングである」という考えをもつより、学習者を中心として考え、彼らがどのように育つか、そのための1つの方法がアクティブ・ラーニングであることがわかる。

さらに、杉江修治(2016)によれば、「アクティブ・ラーニングの発想は、これまでの協同学習の研究と実践という裏づけがあつてなされた」という。なお、協同学習 (Cooperative Learning) は今日まで最も研究されている学習理論の一つであるといわれている。

数多くの新概念や新方法が提唱されているようだが、言うまでもなく教育と学習は常に一対となつているので両方を同時に改善することが望ましい⁽¹⁰⁾。

ところで、筆者がこれまで「インターネット・マネジメント」という混合型システムに対して情報文化学的な手法を適用することにより、そこに内在している情報文化空間を考察してきた(符 2015)。その際、混合型システムにおける情報と文化の周辺、すなわち情報文化的外界が複雑であるため、情報文化的手法に加えて社会文化的なアプローチを試みて考察した。つまり、情報文化と社会文化との間に何らかのつながりがあるように見受けられることをふまえて混合型システムの構造の考察を試みることにより、1つの構造モデル(三角形モデル)が得られた(符 2015:p.34 図7)。その一方で、国際情報の研究領域とそのアプローチから、「情報・文化・社会」を頂点とする三角形のモデルの導出を試みた(符・符 2015:p.152 図2)⁽¹¹⁾。

こういった構造モデルの相互関係により、「情報」と「文化」を中心とした分野における授業の構造化モデルを構築することができるのではないかと考えており、以下ではその詳細について述べる。また、協同学習論的な視点から、構造モデルの主要構成要素の意味づけを試みたことを併せて紹介する。

2. 構造モデルと三角形モデル

2.1 混合型システムと構造モデル

基本的な考え方および主要概念などを理解する助けとして拙文(符 2015, 符 2017)より以下のことを引用する。まず、図1に示されたのが「インターネット・マネジメント」という混合型システムである。インターネット・マネジメントであるゆえに、それ

を1つの混合型システムとして捉えることができ、本稿では「インターネット・マネジメントの混合型システム」あるいは単に「混合型システム」と呼ぶことにする。

図1の中間をみると、上段に情報、中段に商品・サービス、下段に文化という具合に、「情報-商品-サービス-文化」は、串刺しているようにみえるが、全て繋がっている。このことから、商品・サービスは「情報文化」と「混合型システム」の接点であると捉えることができる。

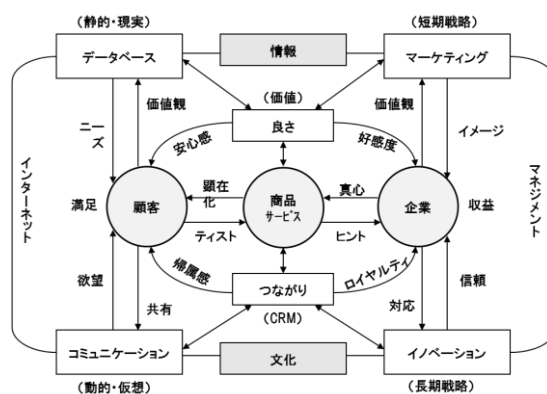


図1. 混合型システム

(出典) 符 2015:p.31 図5.

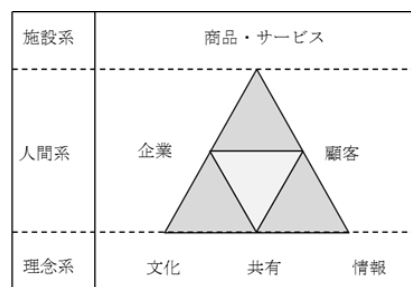


図2. インターネット・マネジメントという混合型システムの構造モデル

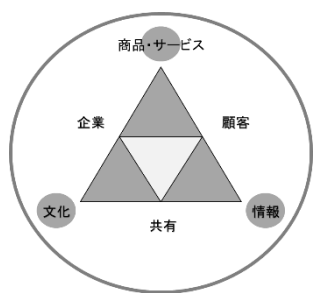
(出典) 符 2015:p.34 図7.

情報文化を「理念系、施設系、人間系」(片方・今井 1999:pp.80-82) という3つの系でとらえることができるように、混合型システム(図1)も3つの系によって考察可能と考えられる(符 2015:p.30 表1)。マクロ的考察についてさらに構造的な捉え方で考えればそのミクロ的考察ができる。また、片方善治が提案している「情報文化の構造」(片方・今井

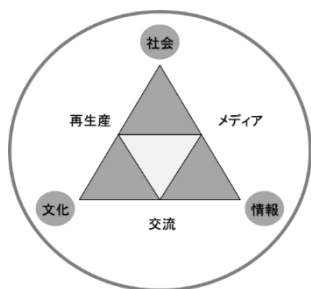
1999:p.83) と対応させることにより、混合型システムの構造が得られる(符 2015:p.31 表 2.)。さらに「情報文化の構造における主要特性」(片方・今井 1999:p.83) を考慮しながら混合型システムの情報文化的構造を簡略化すると、混合型システムの進化構造が得られる(符 2015:p.31 表 4)。

構造化し、全体に目を配ると概念を明らかにする方向が見えてくるはずのだが、「混合型システムの情報文化的進化構造」にはまだ不明瞭な部分が残っているのが事実であろう。

そこで、情報文化と社会文化との間に何らかのつながりがあるように見受けられることをふまえて、社会文化的なアプローチとして知られている活動理論⁽¹²⁾ (Engeström1987:pp.79-80, 符 2017:p.186) を用いて、混合型システムの構造モデルを提案した(図 2)。



(a)混合型システムの三角形モデル



(b)国際情報学の三角形モデル

図 3. 各三角形モデルの中核的な構成要素

(出典) 符 2017:p.182 図 4.

2.2 三角形モデル

ここで、図 2 の「三角形モデル」に注目し、構造モデルの中核的な構成要素を抽出すると、図 3(a)が得られる。

また、図 3(b)は次のようにして得られる(符・符

2015)。インターネットとマネジメントという 2 つの異質なシステムを統合して得られた混合型システムと同様に、国際学と情報学の融合による国際情報学を考案することが可能だろうし、国際情報の研究領域とそのアプローチについては、例えば折笠和文が 7 つ取りあげている(折笠 2003: pp.47-48)。これらは、国際情報あるいは国際情報学は (1) 情報、(2) 文化、(3) 社会、といった 3 つの側面からアプローチできることを示唆している。

2.3 システムとしての経営戦略の構造モデル

図 4 に示された構造モデルは、社会を中心に、企業と顧客を主軸におき、関連の要素とその属性(情報、文化、メディア、再生産、価値観、差別化、共同体、イノベーション)を有機的にかつバランスよく組み合わせたもので、システムとしては非常に対称性のよいものである。これは図 1 の構造モデルを応用したものと捉えられる。

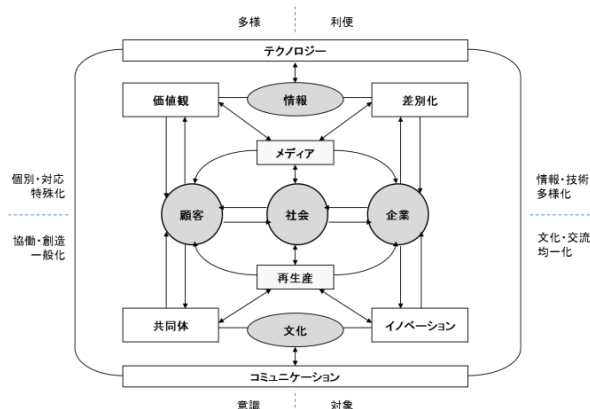


図 4. グローバル社会志向型企業の経営戦略の構造モデル

(出典) 符 2016a:p.120 図 5.

すでにわかったように、図 1 の構造モデルに対応する三角形モデルは図 3(a)である。対して、経営戦略の構造モデル(図 4)に対応する三角形モデルは図 3(b)である。このように、システム・モデルと三角形モデルとの対応ができることは重要である。

図 3 でいえば、(a)と(b)の上の頂点、すなわち構成要素((a): 商品・サービス, (b): 社会)の違いにより、異なる 2 タイプの構造モデル(図 1 と図 4)を

構築することができるといえよう。

また、図3の(a)と(b)の三角形の底辺(文化-情報)というのが、図2の理念系にあたり、それは企業の経営理念であると解釈できる。つまり、同じ経営理念の下でも異なる志向の経営戦略とその構造モデルが可能であることが伺われる。

つまり、構造モデル(図1)から、エンゲストロームの活動理論(Engeström1987)を用いて(構造化して得られた構造モデルに)対応する三角形モデルを抽出することができる。逆に、三角形モデルから対応する構造モデルを構築することもできる。しかも、図3に示したように、両者(図3の(a)と(b))の間に共通なモノは文化と情報であると考えられる。

3. 商品サービスと教育と授業

3.1 企業と顧客の接点：商品サービスの重要性

一般的に言えば、顧客満足度は、顧客が購入前に抱いた期待と、購入後に知覚した成果の差である。その場合、企業と顧客の接点からみれば、商品サービス(=商品・サービス=商品やサービス、以下同様)が、大きな比重をもち、顧客の満足度に、影響を及ぼす。商品などの良さが顧客の手に届いた時から始めてわかるものである。ゆえに、その良ささえ認められれば、顧客が満足できて、企業と顧客は何かの形で繋がられる(図5)。

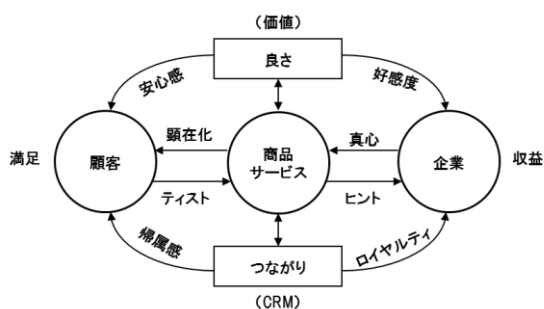


図5. 顧客満足・商品サービス・良さ・つながり・企業収益

(出典) 符 2015:p. 29 図 2.

3.2 情報と文化に基づく授業の構造化とモデル

教育または授業も一種のサービスでその良さが学生の満足度などで測れると考えられる。

そのため、「企業(主体)・顧客(対象)・商品サービス」(図5)と同様に、「大学(主体)・学生(対象)・教育」または「教員(主体)・学生(対象)・授業」の関係を考えて、図1と図4から図6が得られる。

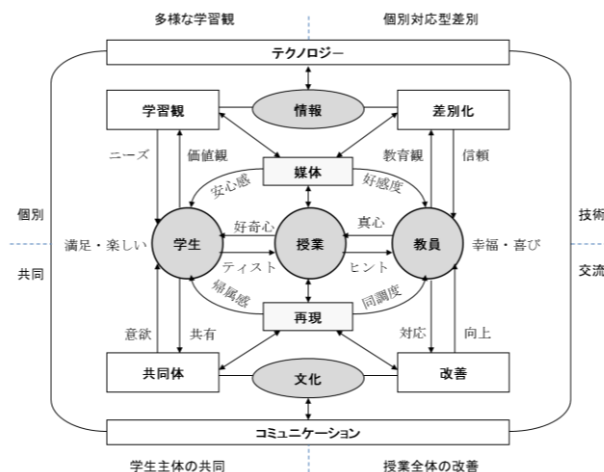


図6. 情報と文化に基づく授業の構造化モデル

(出典) 筆者作成

図6において、「テクノロジー(技術)」には序論で述べたような「ICT」はもちろんのこと、「授業の技術」なども含まれている。「媒体(メディア)」には、パソコンはもちろん、黒板や教材、教具、文具および言葉などもある。「差別化」は良い価値を提供するためのプロセスであり、「テクノロジー」を用いて価値ある「情報」を提供することによりそれが実現できると考えている。

また、「コミュニケーション(交流)」は、序論で述べたような様々な文化的背景をもつ学習者間の交流はもちろん、授業内外における学習者と教員の間でのやりとりや対話なども含んでいる。「文化」は蓄積された知識や制定されたルールなど。「文化」にもとづき、「共同体(コミュニティ)」(13)などを通じて「コミュニケーション」が行われると考えられる。

図6は示唆に富んでおり、その主要構成要素についてもう少し考察したい。また、序論でみてきたように、アクティブ・ラーニングや反転学習と協同学習との関係から、以下では協同学習論的な視点から考察し、その意味づけを行う。

4. 協同学習論の視点からの考察

4.1 協同学習の定義とその期待される効果

町岳・中谷素之(町・中谷 2013:p.83)によれば、「協同学習」は、英語では“Collaborative Learning”や“Cooperative Learning”に相当し、「きょうどう」には「協同」「共同」「協働」などの漢字が当てられ、「協調」という言葉もほぼ同義に使われている。

また、岩田好司(岩田 2011: p.61)によれば、協同学習(Cooperative Learning)の理論的背景は社会心理学的な理論に構築主義的な理論が融合したものとなっているが、後者の側面を特に意識した学習論を Collaborative Learning と呼ぶ動きがある⁽¹⁴⁾。

協同学習の効果は、Vygotsky の発達理論によって根拠づけることができる(岩田 2011: p.70)⁽¹⁵⁾。

Vygotsky は、学習者が一人で達成できるレベルと、他者の援助によって達成できるレベルとの間の領域を「発達の最近接領域」(Vygotsky1971: pp.84-91)と呼んだが、一人で行おうとするとできないのに、皆でやるとできてしまう、という経験に対応した学習の可能性の領域である。協同学習ではこうした可能性を利用する。つまり、教員が少し高いところ、成績上位の人の少し上くらいにレベル設定し、学習環境を整えてあげると、学習者たちは学び合いながら背伸びをはじめ、一斉にジャンプするということが起こる。これが「グループ・ダイナミクスのダイナミック」と呼ばれる所以である。

次節以降では「 」が付いた単語などは、図6のなかにあるモノ(要素など)を意味する。

4.2 共同体とコミュニケーション

通常の学習観は学習が個人的な営みであるという個別的な学習観であろう。対して、Vygotsky (ヴィゴツキー2001)らの社会構築主義的な学習観は三者関係である⁽¹⁶⁾。つまり、あらゆる学びは、他者との関係を内含した社会的な営みであり、社会あるいは「共同体(コミュニティ)」を構成する他者との「コミュニケーション」を通じて、学習が生起する。協同学習はこうした学習観にもとづいて学習者が協同的に学び合う共同体をつくっていく。

このように、協同学習においては、内容とプロセス(協同すること)の両方を同時に学んでいく。

岩田(岩田 2011: p.57)は、教室という場合に限定して、教室を互いに助け合い、尊重し合う共同体とし、そこで学ぶために協同し、同時に協同を学ぶのであると論述している。しかしながら、本稿では、図6に示されたように、共同体を教室に限定せず、教室を含む「共同体(クラス、クラブ、教員、学友、親などから構成されるコミュニティ)」を考え、そのような「共同体」で、自分と仲間のために学ぶという状況が発生し、そのような状況における学びは個別的や個人主義的なプロセスというよりは、社会的や共同体的、協同的なプロセスとなりうると考えている。

前述のように、Vygotskyによれば、あらゆる学びはつねに他者を内包し、他者との「コミュニケーション」を通じて学びが社会的、協同的に生起する。つまり、すぐれた他者(教員や学友)を模倣することから始め、次第に学びを深化、内面化するという学習プロセスをたどる、すなわち「再現」(図6)といえよう。「再現」は授業内容などを再現する意味もあるので、後述の共同学習効果(その①)との関係性があると考えられる。

4.3 学生の帰属感と教員の役割

岩田(岩田 2011: p.69)によれば、授業回数が重なり、グループや授業作りが進むと、学びの共同体が形成されてくる。学習者たちはより積極的に参加し、協同するようになる。一人ひとりが協同学習者として成熟し、グループや授業が自律性を獲得していく。こうした学び合いの共同体の形成とともに、学生(学習者)の「帰属感」の高まりと考える。

その一方、教員の役割はティーチャーやコーチからファシリテーターへと変化していく⁽¹⁷⁾。

教員がこうした役割を担うためには、教員自身が意識的に学生との利害関係を感じさせない雰囲気づくりが必要であろう。また、役割理論(e.g.廣松 2010, 岩田 2011: p.68)によれば、教員が教員という役割を空け渡すとき、学習者がその役割を自分たちで演じるようになる。すなわち、教え合い、学び合いが始まり、次第に教員の援助を必要としない自律的な学びの共同体が出来上がるのである。そのときの教員は、共同体にとっての他者、あるいは学びのリソー

スに近い存在で非常に理想的な形であろう。

4.4 好感度と授業改善

4.1で述べたように、協同学習の効果はVygotskyの発達理論によって根拠づけることができる。そして、岩田(2011)によれば、協同学習の効果は次の3つの面において期待される。①対象世界との関わり、②他者との関わり、③自己との関わり。

①まず対象世界には授業内容や課題などがあると考える。対象世界との関わりにおいて効果が見られるのは、学習面・学業成績の向上、「(学習)意欲」(図6)の高まり、自らの学習に対する積極的なとりくみ、授業や教員及び学校に対する「好感度」や「同調度」(図6)の高まり、高次の推理能力、批判的思考力などである。

②学習成果が上がり、社会性が身に付き、人格的に成熟する。協同学習を続けていくとクラスの雰囲気がよくなり、授業中、授業外での「交流(コミュニケーション)」が進んで人間関係が深まり、「安心感」が得られる。すると学習者はますます授業に参加するのが「楽しい」、「意欲」的、積極的に学習に取り組むようになる。

③成績、社会性、心理面での「改善」が見られ、好循環を生むのである。結果的に、それらは授業の「改善」(図6)につながると考えられる。これらは序論で述べた2つの改善に近いものであろう。

5. 結論

多様性を伴うグローバル化が進むにつれ、大学を取り巻く環境や大学教育も大きく変わろうとしており、新しい社会要請や学生ニーズに応えるための大学教育に焦点を当て、「情報」と「文化」をベースとした「授業」に関する構造化を試みた。システム的な思考と構造的な手法に関する研究成果などを踏まえながら、非常にバランスのとれた平面的な構造化モデルを考案した(図6)。また、協同学習論的な視点から構造化モデルに関する考察を行い、その主要構成要素や用語を意味づけた。

このような構造化モデルを考案した意義は、複雑化した大学教育問題を理解するための1つの手掛かりとなるのみならず、大学における授業というシス

テムの構造を視覚的に把握できる点であると思われる。とくに、アクティブ・ラーニング(能動的な学習)という言葉を使わない大学はないといってよいほどアクティブ・ラーニングが定着している今日では、考案した構造化モデルはそれを具現化する可能性を示唆していると考える。

とはいえ、本稿はあくまでも大学の授業における事象・現象に対して「合理的モデル」を想定したうえで構造化した初期段階のものである。そのため、解明できた点は必ずしも多くはないが、若干なりとも寄与できたと思われる。今後、さらなる考察と検証を重ねていきたい。

注

- (1) ベネッセ教育総合研究所(2012)「第2回大学生の学習・生活実態調査報告書」(http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/daigaku_jittai/2012/dai/index.html)を参照。
- (2) 中央教育審議会が「1. 2030年の社会と子供たちの未来」(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1364310.htm)のなかで次のように述べている。グローバル化は我々の社会に多様性をもたらし、また、急速な情報化や技術革新は人間生活を質的にも変化させつつある。こうした社会的変化の影響が、身近な生活も含め社会のあらゆる領域に及んでいる中で、教育の在り方も新たな事態に直面していることは明らかである。
- (3) すなわち、現在の高度情報化・国際化・価値観の多様化など、今後の変化の激しい社会に主体的に対応する「個性」重視の学習指導や教育のあり方が問われている。
- (4) ICTの活用でいえば、近年、欧米の一流大学を中心に、インターネット上で無料受講できる公開オンライン講座(「MOOC(Massive Open Online Course)」)を提供する動きが注目されている。これは高等教育をオープンアクセス化しようという取り組みで、ネットにつながれば好きな時間、好きな場所で、世界中の授業を受けることができる。
- (5) 中央教育審議会(2015)「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～(答申)」によれば、学生が主体的に課題を設定し、問題解決的な活動が発展的に繰り返されていく一連の学習方法の総称をアクテ

- ィブ・ラーニングという。
- (6) 反転学習は、オンラインと対面を組み合わせたブレンド型学習 (Blended Learning) の一形態である。反転授業研究の第一人者とされている山内祐平によれば、それはまた「完全習得学習型」と「高次能力育成型」に分類できる。詳しくは、東京大学の「FLIT (反転学習社会連携講座)」 (<http://flit.iii.u-tokyo.ac.jp/>) を参照されたい。
- (7) つまり、意見を出し合って考える、わかりやすく情報をまとめ直す、応用問題を解く、実際にやってみて考える、などいろいろな活動を介して学生が主体的に学びに取り組む教授法である。
- (8) 例えば、山梨大学工学部の取り組みが良い事例といえる (http://www.juce.jp/LINK/journal/1503/02_01.html)。この事例では、「講義ビデオを作成して学生に事前に視聴させることで授業中の講義の時間を減らして、その代わりに学生主体の活動を行わせる」という基本姿勢で試行錯誤を行ってきた結果、①知識伝達量を減らすことのないアクティブ・ラーニングの導入は可能であること、②教員の講義を聞くだけの授業に比べて予想以上に大きな教育効果の差が表れることなどが明らかになってきた、という。
- (9) 山内祐平(2015)「学習効果を高める反転授業のデザイン」 (<http://flit.iii.u-tokyo.ac.jp/seminar/003.html>) を参照。
- (10) 例えば、アクティブ・ラーニングによる不断の授業改善を推進するのに当たり、3つの実現が必要であると言われている。すなわち、①習得・活用・探究という学習プロセスの中で、問題発見・解決を念頭に置いた学びの実現；②他者との協働や情報との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める、対話的学びの実現；③粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる、主体的な学びの実現。
- (11) これらの三角形モデルの中核的な構成要素を抽出して (符 2016b)、それぞれの中核的な構成要素からなる三角形モデルは同じ「文化ー情報」を底辺にもつという相互関係があることが考察された (符 2017)。すなわち、これらの構造モデルは「文化ー情報」を底辺にもつ三角形モデルと対応している。
- (12) 活動理論は、一般に第1世代、第2世代、第3世代と分けられている (Engeström1987:pp. 79-80)。第2世代は、主体が個人から集会的になると、集団内の対話 (コミュニケーション) をもたらす共同体 (コミュニティ) の機能が他の道具とは異なる役割を果たすことに注目し、共同体を他の道具と区別する。また、人間活動は常に分業とルールによって支配される共同体の内部で生じるのである (Engeström1987:p. 168)。エンゲストロームは、「行為」と「活動」を区別し、前者は個人によってなされ、後者は集団によってなされる人間の行動であると定義した。活動理論とは、「人間の協働的・社会的な実践活動のシステムを分析対象にして、その新たなデザインを実践現場で生み出そうというもの」である。この分析単位となっているのが「活動システム」である。活動システムの基本となるのは、「主体」と「対象」と「共同体」の互いの関係である。この基本関係を軸にして全部で6つの構成要因によって成り立っている。
- (13) 例えば、前述の活動理論では、主体が個人から集会的になると集団内の対話 (コミュニケーション) をもたらす共同体 (コミュニティ) の機能が他の道具とは異なる役割を果たすことに注目し、共同体を他の道具と区別する。
- (14) これらの用語の定義には、まだ定まった統一見解が築かれていないとする見方もあるが、協同は Cooperation という「グループ・ダイナミクス (後述参照)」で用いられてきた用語の訳語であり、Collaboration は認知心理学からきた類似の概念で、協働・協調といった訳語が当てられる。
- (15) 協同学習は、ペアを含めたグループ学習の一種であり、協同の学びを強化、促進したグループ学習、あるいは構造化されたグループ学習であると考えられる。協同学習は社会心理学や構築主義を基盤としているが、仲間が目標を達せられない限り自分も目標を達成できないという状況をつくるという。
- (16) そもそも、Vygotsky (ヴィゴツキー2001) は、マルクスとエンゲルスの人間と生産を媒介する道具に関する考えを人間の精神機能の発達に応用させた。つまり、人間と社会の間には、道具の媒介があると考えた。人間は、心理的記号の助けをかりて、外からの働きかけから脳に新しい結合をつくり出すと考えているので、高次の精神活動は、言語や、社会文化などの記号によって媒介された人間と社会の関係から生じるのである。また、Vygotsky は、思考を行うような心のなかの (音声を伴わない) 発話を内言と、コミュニケーションなどを行うような (音声を伴う) 発話を外言と呼び、社会的な外言は内化される内言となり、それによって思考などの高次精

神機能は発達すると考えた。

- (17) ファシリテーターの役割については、例えば、中野民夫（中野 2003:p. vii）が、次のように述べている。ファシリテーターは教えない。その代わりにファシリテーターは、支援し、促進する；場をつくり、つなぎ、取り持つ；そそのかし、引出し、待つ；共に在り、問いかけ、まとめる。

引用文献

- Engeström, Y. : 1987, *Learning by expanding: An activity-theoretical approach to the developmental research*, Orienta-Konsultit Oy, Helsinki. (山住勝広他 (訳) : 1999, 『拡張による学習—活動理論からのアプローチ』新曜社)
- Vygotsky, L.S.: 1971, *Mind in Society*, Edited by M. Cole, V. John-Steiner, S. Scribner, E. Souberman. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- ヴィゴツキー, L. S. : 2001, 『思考と言語 新訳版』(Vygotsky, L.S.:1934, *Мышление и речь*, 柴田義松(訳) 新読書社.
- 岩田好司 : 2011, 「フランス語教育と「協同学習」—「学びの共同体」づくり」『日本フランス語教育学会「Revue japonaise de didactique du français」』6(1), pp. 57-72.
- 折笠和文 : 2003, 『国際情報論』同文館.
- 片方善治・今井賢 : 1999, 『情報文化入門』海文堂.
- 教育課程研究会編集 : 2016, 『「アクティブ・ラーニング」を考える』東洋館出版社.
- 私立大学情報教育協会 : 2015, 「特集 反転授業を組み合わせたアクティブ・ラーニングの取り組み」『大学教育と情報』No. 150.
- 杉江修治 : 2016, 『協同学習がつくるアクティブ・ラーニング』明治図書出版.
- 中野民夫 : 2003, 『ファシリテーション革命』岩波書店.
- 廣松渉 : 2010, 『役割理論の再構築のために』岩波書店.
- 符儒徳 : 2015, 「混合型システムに内在する情報文化空間に関する一考察」『情報文化学会誌』22(2), pp. 28-35.
- 符儒徳・符雅娜 : 2015, 「国際学と情報学の融合—国際情報学に関する1つの試論—」『国際情報研究 (日本国際情報学会誌)』第12号, pp. 149-154.
- 符儒徳 : 2016a, 「グローバル社会志向型企業の経営戦略に関する一考察—構造モデルの構築—」『東京女学館大学紀要』第13号, pp. 113-123.
- 符儒徳 : 2016b, 「3つの三角形モデルの相互関係について」『情報文化学会第24回全国大会予稿集』東京大学, pp. 71-74.
- 符儒徳 : 2017, 「社会志向型企業の経営戦略の構造モデルに関する一考察」『開智国際大学紀要』第16号, pp. 179-189.
- 町岳・中谷素之 : 2013, 「協同学習における相互作用の規定因とその促進方略に関する研究の動向」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学』Vol. 60, pp. 83-93.

日本国際情報学会誌規程

第1条 (目的)

1 日本国際情報学会（英文名：Japanese Society for Global Social and Cultural Studies、以下「学会」という）は、学会の活動成果の発表を目的に日本国際情報学会誌『国際情報研究』（英文名：The Journal of Japanese Society for Global Social and Cultural Studies、以下「学会誌」という）を発行する。

第2条 (編集委員会)

- 1 学会誌の企画、原稿の募集（依頼）及び編集のために編集委員会を置く。
- 2 編集委員会は、編集委員長、編集副委員長各 1 名、および編集委員若干名によって構成される。
- 3 編集委員長は、会長、副会長、理事の中より理事会が選任する。
- 4 編集副委員長は、編集委員長が会員の中より推薦し、理事会が選任する。
- 5 編集委員は、編集委員長が会員の中より推薦し、理事会の承認を得るものとする。

第3条 (執筆者の資格)

- 1 執筆の資格を有する者は次の各号に掲げる者とし、執筆は公募及び依頼とする。
 - (1) 会員
 - (2) 会員を筆頭執筆者とする共同執筆者
- 2 前項各号に掲げる者以外の者から執筆の申し出があった場合には、編集委員会はこれを承認することがある。
- 3 会費未納者については執筆資格を停止する。

第4条 (原稿の要件)

- 1 学会誌に執筆する原稿の要件は、次の各号のとおりとする。

- (1) 未発表の原稿であること。
 - (2) 完成原稿であること。
 - (3) 原稿の種類は、次のいずれかに該当するものであること。
 - ① 研究論文 (審査論文: Original)
 - ② 報告論文 (自由投稿論文: Review、研究ノート: Research Report)
 - ③ 書評 (Book Review)
 - ④ その他編集委員会が認めたもの
 - (4) 論文の原稿は、表、図、写真を含め 12 ページ以内とすること。研究ノートその他は特に形式は定めないが、論文に準拠することが望ましく、またそのまま掲載できる完全原稿とし、400 字原稿用紙で 20 枚以内とする。ただし、編集委員会が、特別の事由を認めたときはこの限りではない
 - (5) グラフを含む表、図、写真は、そのまま製版できるように作成すること。
 - (6) 原稿の使用言語は、印刷可能な言語の範囲内とすること。
- 2 年度における投稿は、研究論文、報告論文、及び書評で各 2 稿以内、または合計 3 稿までとする。ただし共同執筆は、この数に含まない。

第 5 条 (原稿の採択)

- 1 執筆原稿が学会の主旨及び第 4 条・第 7 条に規定する原稿の要件・形式に合致しないとみとめられる場合には、不採用とする。また不採用になった原稿の執筆者は、結果に対する異議申し立てをできないものとする。
- 2 投稿原稿の採否は、以下の(1)から(5)の細則に従い、各分野の専門家(レフェリー)に投稿原稿の審査を依頼し、その意見をもとに編集委員会で審議し、決定する。
 - (1) 投稿原稿は、まず編集委員会において、その内容について第一次審査を行う。
 - (2) 第一次審査にパスした原稿は、匿名でレフェリーに送られ、審査を受ける。レフェリーからの審査意見は、編集委員長に伝達される。
 - (3) 投稿原稿は、レフェリーの審査意見をもとに編集委員会で審議し、採否を最終決定する。
 - (4) 審査にあたる、レフェリーの名前は公表しない。
 - (5) 編集委員会の判断により原稿執筆者に、内容変更の依頼を行うことがある。

第 6 条 (学会誌の発行)

- 1 学会誌は、各年度 1 回発行することとし、各年度の原稿募集 (依頼) ・執筆期限・発行期日等は、編集委員会が決定し、公表する。

第 7 条 (論文原稿の形式)

- 1 学会誌に執筆する論文原稿の形式は、編集委員会が別に定める「日本国際情報学会誌執筆要領」によるものとする。ただし、「日本国際情報学会誌執筆要領」ではその論文の真価を表現できないと編集委員長が認めた場合は、別途編集委員会が定めた形式による。

第 8 条 (論文等の転載)

- 1 学会誌に掲載された論文の転載は、その学会誌発行後半年を経過していない場合は、編集委員会と協議し、承諾を得るものとする。
- 2 転載論文等には、学会誌に初出した旨を付記するものとする。

第 9 条 (校 正)

- 1 校正是著者校正とし、校正期限を遵守し、校正時に大幅な訂正を行わないこととする。
- 2 前項の規定に反し、執筆者が校正時に大幅な訂正を行い、学会誌の発行に重大な支障をきたすおそれがある場合には、第 5 条第 1 項の規定を準用する。

第 10 条 (原稿料)

- 1 原稿料は、会員以外の者への依頼原稿を除き、無料とする。

第 11 条 (改 廃)

- 1 この規程の改廃は、編集委員会の議を経て、理事会が行う。

附 則

この規程は、平成 17 年 5 月 1 日から施行する。
平成 17 年 5 月 第 5 条を改定する。
平成 21 年 12 月 第 1 条を改定する。
平成 22 年 6 月 第 4 条、第 5 条を改定する。
平成 23 年 8 月 第 3 条 2 項、第 4 条 2 項を追加する。

初回 平成 15 年 8 月 30 日理事会決定

第 4 回改定 平成 23 年 8 月 8 日理事会決定

編集後記

『Kokusai-joho』が第2号を迎え、無事発行に至りました。これも会員の皆様のご協働の賜物と感謝しております。

今回も多岐にわたる分野からのご投稿をいただきました。各論文、レポートはタイトルのみならず、アイデアの冒険と刺激に満ちた内容が目立ちます。自分の専門領域はもちろんのこと、関心のある領域と関連させて極めた研究は、枠に収まらない躍動的な論文となり、多くの研究者の意欲を掻き立てることでしょう。

今後も『Kokusai-joho』が、表現者のインスピレーションとなることを願ってやみません。

(加藤香須美)

編集委員会 委員長 佐々木 健
委 員 加藤 香須美
委 員 川原 有加
委 員 立石 佳代
委 員 坊農 豊彦
委 員 増子 保志
委 員 村上 恒夫

『Kokusai-joho』第2号(2巻1号)2017年度 日本国際情報学会誌

2017年7月2日発行 領価2,000円 (CD配布・送料込み)

発 行 日本国際情報学会
静岡県静岡市駿河区谷田 52-1
静岡県立大学国際関係学部
諏訪一幸研究室
TEL 04-2996-4160
FAX 04-2996-4163
URL <http://gscs.jp/>

編 集 日本国際情報学会 編集委員会

無断転載を禁ず